



多
香
鳥

目次

文書 11	
文書 11	3
文書 12	
文書 12	13
文書 13	
文書 13	51
文書 14	
文書 14	97
多香鳥王	
多香鳥王	103
奥書	107

文書 11

文書 11

文書 11 (片岡文書)

片岡比羽犁から北村恒忠氏宛て。メールに添付。

2019.12.21. メール

(本文)

お疲れ様です。

お問い合わせいただいている香香美清雅の件、これはわたしからの報告書のようなものです。

もっとも、期待に添うようなものではありません。

それでもということなら、これしかわたしの知る事はありません。

内容に関しては読んでいただければ、おわかりいただけるかと思います。

ご確認ください。

以上。

(ファイル)

2019.09.15.

15 日、深夜にマンションの呼び出しベルがなった。

時刻は 0 時を過ぎている。(ですから、これは感覚的には 14 日の更けた深夜、ということなのですが…) たしか 30 分くらい。

みなさんの言い方をそのまま使えば鐵の貞操帯の女ですから、この時間帯に普通来客はない。

又、酔っぱらった友達が止まらせてもらいに来たのかと思った。

ですから、Line にメッセージが入っていないかどうか確認したのを覚えている。

ベルが鳴ってから、しばらく時間が立ってしまったのに、もう一度鳴らされることはなかった。

或は呼び出し間違いかと思った。

放っておいては気持ちがわるく思えたので、ドア・スコープから確認する。

香香美清雅氏だった。

香香美氏から帰国の連絡も、帰国予定の正確な日取りもいただいていたので、驚く。

ドアを開けた時、チェーンを掛けているのをわすれてドアをかなり大きく響かせてしまったほどである。

見ると、ドアの前の香香美氏は荷物らしい荷物も無く、(たぶん本来は)薄紫色のシャツに黒いスラックを履いている。いつもと違いネクタイはない。ベストもである。それがま
ず不穩だった。

次に髪の毛も服も雨にびしょびしょに濡れていて(その日雨が降った記憶はない。また、
外に雨は降って居なかった。)したたって床が濡れているほどだった。

香香美氏は笑って「久しぶりだね」と謂った。

わたしには様々な疑問ばかりがわいてきて、とても普通に挨拶することも、何からか順
序だてて問いただすこともできなかった。

わたしが沈黙している爲、香香美氏は云った。

「入っていい？」

香香美氏は私の答えをすでに知っていたので、答えもしない私の横を通過して上がった。

わたしは鍵とチェーンを掛けた。

ゆかに濡れた足跡が点々と附いた。

LDKにまで来た。

わたしは其の時に彼が、ベトナムかどこかから海を泳いで渡ってきたかの錯覚にとらわ
れた。思わず笑ってしまった。

何故、わたしが笑ってしまったのかわからない。香香美氏は滑稽ではなかった。むしろ雨
に濡れ、いたわしくさえわたしは思っていた。

わたしは自分が滑稽だった。あまりにも心と体とがバラバラだったからである。

香香美氏は振り返った。

その時に彼の体臭が強烈に匂った気がしたのを覚えている。(いい匂いです。芳香という
のでしょうか。百合の匂いに動物的な媚薬を混ぜてココナッツオイルを塗りたくった様
な匂いです。)

香香美氏は私がわらい転げるのを咎めなかった。

微笑んで謂った。

「服、ぬいでいい？」

「脱がなきゃ…風邪ひいちゃう」

「どこに脱ぐ？」

「どこでも…シャワー浴びてきなよ。髪の中までぬれてるじゃん」

わたしは思いだしてバスタオルを取りに走った。もう笑ってはいませんでした。返って
くると、そこに香香美氏はいなかった。

勝手に出て云って仕舞ったに違いないと思った。

ですから、わたしは外に飛び出す。

誰も居ませんでした。エレベーターまでは距離があった。まずベランダから外を確認し
ようかと思った。

ふたたび室内に戻った時、バスにシャワーの音が響いているのに気づいた。

正直言ってわたしはほっとた。

脱衣所には行って、摺りガラスのむこうには聲をかけずに洗濯機の上にタオルをたたん
でおいた。その前に床に投げ脱いであった服を、洗濯機に入れた。

ポケットの中にはいくらかの小銭が入っているだけだった。

わたしはそれを LDK のテーブルの上に置いた。

LDK のソファに座って、わたしは彼に何から聞こうかと迷っていた。

そのくせ、シャワーの音に耳を澄ましていたのを記憶している。

シャワーの音が止まって、時間があつた。不審になるくらいに長かつた。

出て来た時、彼が髪をふいていたに違いないことに気付いた。

前より長くなっていた。肩にかかるくらい。前は、たぶん二十代のころの写真で見られたはずですが、「徒刑囚のような」坊主あたまだった。

わたしは彼が日本を離れた後に、髪の手入れもできないくらいに苦労しているのだと思った。

髪はまだ濡れていた。香香美氏は腰にバスタオルを巻いていた。わたしが着替えを出してあげなかったせいだった。

わたしは香香美氏に謂つた。「髪、乾かしたら？」と。

「タオルある？」

「待つて」と、私は言つて香香美氏をソファに座らせて、ベッドルームにドライヤーを取りに行った。

帰つてくると、香香美氏はソファにもたれこんで眼を閉じていた。安らかに見えた。やつと落ち着ける所に返つてこれたのだと、わたしは安心した。

香香美氏は目を開けずに言つた。

「ひとり？」

「わたし？」

「まだ？」

「駄目？」

ドライヤーを刺して、香香美氏の髪を乾かしてあげた。タオルで本当にしっかり拭いたのが疑われたほど、彼の髪は濡れていた。彼は、あれから十年近い時間が流れたにも拘わらず、あの頃にならなかつた。綺麗だった。

自分だけが年を取つた気がした。

髪を乾かすうちに、白髪の何本かがあつたのに気づいた。嘆かわしく思つた。

「変わらないね。」と私は云つた。

「僕？」

「変わらない。…わたしだけ。更けたでしょ？」

「ちょっとだけおとなになつた」

「それ、同じ意味」

「僕も変つたよ。」

「嘘」

「変わりようもない。筈なのに、やっぱり變つてくね。…どうしてだろう？ 見る風景だけがどんどん變つてくんだ」

わたしは手を止めて香香美氏の前に膝間付いて座つた。彼の顔を見ながら話す必要を感じたからである。

「ね？ 聞いていい？ なんで、日本に返つてきたの？」

「理由？ 必要？…一応、母国だぜ」

「もう二度と帰ってこないと思った。」

「会えないって？」

「日本ではもう会えないって。まして、東京で…同じ部屋で…」

「どこかの監獄か精神病院かでも？」

「例えばモロッコ。例えばヒマラヤの雪の中。例えば、」

「そんなにロマンティックじゃないよ。」

香香美氏は目を開けた。このときには完全にリラックスしていたように思う。

ふと、彼がひとりで戻ってきたのではなかった筈であることに気付いた。

「女の子たちは？」

「女の子？」

「ベトナムの…」

「蘭？」

「…だっけ？」

「あの子たちは、」

「いるんでしょ？ いっしょ？」

「いるね…」

「どこ？ 待ってるの？」

「ホテルじゃない？」

「置きっぱなし？ 無責任じゃない？ 不安そう…外国で」

「関係ない」

「なくないよ。…自分でいちいち連れて来たんじゃない？」

「関係できない…彼女たちには彼女たちの物語がある。かならずしもそれは俺のものじゃない。部分的に一致はして居る。でも、常に、あやうくずれて、ずれて、結局は別なんだ」

「さびしいの？」

「彼女？」

「キヨ。孤独なの？」

「それはお前でしょ？…違う？ 淋しくなかった？」

「別に」

「嘘」

「本当に」

「男もつくらずに？…俺も、あなたを、」

「捨てたのに？」

此の時、わたしは思わず笑って仕舞った。此の会話の始終、私には嫉妬の感情はなかった。連れ相いらしい女の子たちにかんしてもである。であるからと言って、どんな感情があったのかは自分でも謂いかねる。感情がうまくまとまらない儘、そのくせに混乱もないのである。

If I were a swan, I'd be gone

If I were a train, I'd be late

And if I were a good man, I'd talk with you more often than I do

If I were asleep, I could dream

If I were afraid, I could hide
ふいに彼はそう歌った。
わたしはその意味を測りかねた。
わたしは云った。
「淋しくはない」
「どうして？」
「淋しいけど、淋しいとも言えない」
「なにそれ？」
「キヨを思ってるから」
「だから不幸なんじゃない？」
「不幸って、それは、他人が自分を基準にして誰かを計って言うだけのものよ。不幸ってなに？ わたしには不幸も幸せも無い」
「何もないって？」
「反対。いっぱい、想いがあり過ぎるから不幸でも幸せでもない…そんなものじゃない」
香香美氏は一瞬沈黙した。
わたしは云った。
「今日は、平和みたいね（是はわたしと香香美氏の間いわばスラングである。精神状態を量る言い方である）」
「平和…かね？ どこにも地雷は吹っ飛ばない…」
「あっちではどう？」
「心配だった？」
「またどこかの王様になってるかと思った」
「ときどきなるね…でも、」
「ちょっとだけ、ちょっと前、あっちで、やばかったでしょ？」
「タオたちと？ 時々ね…でも、別に、王様って言っても、誰かを支配したい欲望の現れなんかじゃないよ。多分ね…あれは、」
「逆に、孤独になりたいじゃない？」
「孤独、なんだよ。孤独なとき、僕はひとりで王様になる…」
「見て」
「なに？」
「見てて」
「お前を？」
「忘れないように。…忘れて他でしょ？ 長い間。見て。それで、忘れないで」
「忘れてない」
「嘘」
「思い出せなかつただけ」
そう云って香香美氏は笑った。
香香美氏はそれからしばらく何も謂わなかった。ですから、私も沈黙した。わたしたちは見つめ合った。何を思うでもなく、それでも心のどこかで言葉を探していた。本気ではなかった。隙間を埋めるように、詞を探す心だけがあった。

気が付いたとき、思い出したことをわたしはつぶやいていた。

「会うんでしょ？」

「誰？」

「彼等…」

「白雪？」

彼は一瞬、なにか言いかけて、それから口を閉じた。

ややあって、香香美氏は云った。

「気にしなくていいよ」

「気になる」

「なぜ？」

「彼等、あなたを壊すことはできても、守れない」

「とっくに壊れてる…彼等に逢う前から…ひばり、俺の主治医だったろ？」

「直す気なんかなかった」

「僕を？…なぜ」

「どうして、そのままで美しいものを壊すひつようがあるの？」

「でも、ひばりは傷ついたら？」

「美しいものって、結局は破壊的なもの。ふれるもの全部、気付かないうちに毀してまわっちゃう」

「それは、」

「それで自分も傷つく」

「お前の妄想だよ…妄想…ちがうな。なんだろう…自分についての嘘？」

「でも、事実じゃない？」

彼は笑った。

私は云った。

「なんで、此処に来たの？」

「僕？」

「わたしなんか、なんとも思っていないのに」

「思ってるよ」

「嘘」

「後悔してる」

「なぜ？」

「あなたを壊したから」

「わたしを？」

「結局、あなたは僕をしか愛せなかった。そうじゃない？ それは残酷でしょ？」

「そうじゃない。わたしは後悔してない。これからも後悔しない…なんで？」

「なに？」

「なんでわたしに逢いに来たの？」

「まともな別れ方をしてなかった」

「それだけ？」

「それで、」

「せめてお別れを言いに？」

「かもしれない」

「遅い。もう遅い。お別れなら一杯言った。心の中で」

「夢の中でも？」と、香香美氏は笑った。

「たくさん云った。届かなくても」

「じゃ、なぜ、僕を中に入れたの？」

「いまだに、心は離れてないから」

「お別れ云ったのに？」

「時間が一つだけ、まっすぐ流れてる必然なんてない」

「無駄」と言って香香美氏はわたしの頬に触れた。

「無駄？」

「なにを云っても。何をしても。何も。もう、全部、」

「私が？ わたしとのこと？ あなたは本気でそう思ってない。それ」

「無駄」

「わたしにはわかる」

「愛しあったから。距離も無く。素手で。いちど重なって仕舞えば、逆に、だからこそ見るべき風景もささやく詞も心もなにも無駄になる。重なり合ったゼロの消失点だけが總てになって、なにを重ねてももう本等じゃない嘘かであらめにしかならない…僕たちはもう、なにをやっても無駄。なにも…」

「それならそれでいい」

「来て」と香香美氏は私を腕に抱きあげた。

「やめて」

「なんで？」

「重いよ」

香香美氏はわたしを寝室に連れ、そしてベッドに寝かせると添い寝した。

「疲れた？」

「ぜんぜん？」

「そう？…」それは嘘だった。わたしはすでに自分が実際には必要以上の興奮状態にあったことに此の時に気付いた。

「眼を閉じて」香香美氏は云った。

私は従った。

額にいちどだけ香香美氏の唇が触れたのを感じた。長いキスだった。

気が付けば、その目を閉じていたいつかに、微睡んでしまったに違いなかった。目を覚ますと香香美氏の気配はなかった。

わたしは飛び起きて部屋中をさがした。トイレの中までも。

洗濯機の中に彼の服はなく、テーブルに小銭はそのまま残っていた。

わたしは自分が眠り落ちた一瞬を後悔した。安心しきっていたに違いなかった。時間はわからない。まだ夜だった。それから夜が明けたの気付く迄、私はベッドの上で泣き続けた。

それ以来、彼にはあっていない。

連絡もない。

生死さえ定かではない。

だから彼の最後に関してわたしが知るのは以上である。

文書 12

文書 12

文書 12 (清雅文書)

○

(香香美から久村へ)

2019.09.16. メール

(本文)

一度確認しておこう。事の間緯を。

あなたも。俺も。…あなたの爲、自分の爲、出国から入国迄まとめた。

確認あれ。

(ファイル)

私記。

レ、ヴァン、タオと蘭のビザが手に入ったのは 11 日だったか。

8 月の終わりに日本へ行こうと謂った時にタオは喜んだ。曰く、本当に日本に歸れるのかな？ ビザは？ 嬉しい、と。

その時には自分に一体何の目的があるのかも分かっていなかった。

本当は。

12 日に、不意にベトナムに來た玖珠本穂莖果に逢って、それでようやくにそもその意図を思い出した。

或は、まるで思い出すように、気付いた。

いずれにせよ、ビザが届くまえから、それが間にあえば、最初から穂莖果と同じ日に歸るつもりだった。

13 日。

玖珠本は早朝の飛行機で先に發った。ダナンから。

空港に見送りはしなかった。空港までバイクに載せて連れて行っただけだ。…朝じゃない。明けた深夜の 0 時すぎ。

私たちが乗るのは一日後の同じ時間帯の便。同日にとは行かなかったわけだ。

此の日の夜はタオたちは部屋で荷づくりにおわれたようだった。

タオが電話でそう言い、蘭を預けに來ることも無く、故、わたしは部屋に一人いた。ホテルには取り敢えず二か月分先に払っておいた。もし歸ってこなかった場合、荷物など彼らが処分すればいい。

夜の7時にタオたちが来た。飛行機は明けた0時35分。

一緒に食事し、それから空港に向かおうとタオは云う。

異存は何もない。好きにすればいい。

ベトナム人経営の韓国焼肉の店で食事。タオが選んだ。日本へ行く日だからという事なのだろう。これについてはあなたは思わず笑うだろうか。

食事の間中タオは蘭に日本の事を語って聞かせた。ベトナム語の会話であって、わたしにはその詳細はわからない。察するにもちろん褒めているのだ。すくなくとも彼女にとって先進國で、豊かで、そこにいること自体が彼女にプライドを与える國なのだろう。その実態がいかにあれ、彼女のにとってまったき事実にはすぎない。わたしに言うべきことはなにも無かった。

思うにベトナム人にとって日本が親しいのは本来単にベトナム自体の中国との関係の複雑さによる。中国、乃至所謂支那の諸帝国との緊張と対立が彼等の國の歴史であって、彼等は彼等の愛國心の必然によって日本に親しむに過ぎない。韓国はその用を足さず、台湾・香港はむしろむしろ彼等が共感する親しい境遇の友人にすぎない。後に残るのは所詮日本でしかない。事実、ここではドナルド・トランプが人気である。理由はひとつ、彼が中国嫌いだから、である。それが単に新興アジア勢力への嫌悪にすぎず、かつての日本に対するのとほぼ変わらない嫌悪に過ぎなくとも。又安倍晋三も人気がある。理由は一つ、大量のベトナム人労働者を受け入れたからである。ところで勿論二人の犯罪的な無能さは言うまでもない。トランプ氏の名の許にアメリカ急激に普通の國になり（尤も、それは結果的には「世界」にとってはいい事だったかも知れないが）安倍氏の名のもとに急速に一部の市民による全市民にかかる治安維持法は実態化した。今や芸能・芸術・文化・スポーツ等にかかわる人間の政治的発言さえ一部市民の治安維持法に糾弾される。ジョン・レノンもボブ・マーリーも犯罪者だろう。ピカソのゲルニカにも彼等は火を放つべきだろう。

空港でチャックインしながらレ、ヴァン、タオは誇らしげで、そして幸せそうだった。わたしにはそれが痛ましく思えた。なぜだろう？ けれどもそれはすくなくとも今の彼女にとっては必要な感情で、自然な感情に他ならなかったとしても？ タオの荷物は大量だった。二つのキャリーバッグの中のひとつはベトナムの土産ものに埋まった。もといいた大阪府に行けるかどうかはわからなかった。しかし曰く、日本であった綺夜宇さんのお友達の日本人に、お土産渡さないといけない、と。彼女は素直にそういった。でも、日本人はベトナムが嫌いだから、たぶん喜ばないと思う、と。

飛行機は三十分ほど遅れた。

搭乗ロビーで待つ間に、ダナン市内では見かけることのほぼない日本人が疎らに周囲に点在した。それがタオを刺激したに違いなかった。何度かトイレに立った。ときに顔を洗ったように見えた。髪の毛の先が時に濡れていた。

もうすぐ搭乗が始まるころに、タオは何度目かにトイレに立ってメイクした。出て来たときにタオはわたしに目を合わせなかった。羞じらったのだ。だから、わたしは云った。綺麗になったね、と。

綺麗じゃないよ、とタオ。

かわいくなった、と私。

日本人の方がかわいいよ、とタオ。そして私を見て彼女は笑った。
ベトナムの航空会社だった。飛行機の中に、何人かの自然にふるまうアテンドの中に、獣の檻の中の兎じみた顔をして日本人のアテンドがひとりだけいた。なぜいるのかは知らない。その必要性もわからない。あるいは差別と閉鎖主義と自己憐憫と源氏のひらがな文も読めない国粋文化主義の日本人は、日本人の手が添えてやらなければ小便もできない下等な家畜にすぎないのだろう。一通りの通常の機内説明のあとで日本人アテンドが日本語でもう一度説明した。彼女は云った、當機には日本人アテンダントがごぞいます、日本人のお客様、おこまりでしたら日本人にお声かえ下さいませ、云々。そのうち彼等は地上に滅びるだろう。

其の時に、わたしはいつになく機内に日本人が多いということに気付いた。他にはもちろんベトナムの、そして目立った少数者としてなぜかインド系の堀の深い、中華系アジアでも無ければヨーロッパでも、ましてアフリカでもない固有の種の顔。

タオはすでに日本人の多さに気付いていたようだった。わたしのとなりでいつになく小さくなって、そして緊張し、そして顔を引き攣らせて、自分で自分にその事実を否定していた。

いずれにせよ、複雑な警戒状態に、彼女はいた。

飛び立つ飛行機の窓に蘭は窓の外の、小さな光の点在としてのダナン市を眺めて飽きなかった。

上昇する機内に、いきなりタオが背をのけぞらせ自分の耳を指で塞いだ。

蘭を小突いて早口にささやき、蘭の手をとって彼女にそうさせた。

其の時には、タオのすくなくとも身体が彼女の憧れの日本を拒絶して倦まないことに気付いていたので、わたしは彼女がなにも聞こえないように耳を塞ぐのだと思った。なら、蘭にもそれをさせた事実は、理解不能な異物だった。故、わたしは訝し気な顔をしていたに違いなかった。

省みたタオが上目で行った。

「綺夜宇も、こうしたほうが、いいよ」

一句づつ切る彼女固有の言い方で。

「耳、痛く、ならない、よ」

鼻水を鼻の奥に咬みながら話すような甘え聲。

わたしは聲を立てて笑った。

いつか眠った。

眠りの中に夢を見たに違いなかった。

私は海の中に浮かんでいた。

だから見えるのは青空で在るべきだった。

目に前にはどこまでも広がり、どこまでも青くすき取った海水のゆららぎあった。

由良らぐ水の綺羅らぎの散乱にわたしはさかさまにわたしが浮かんでいるのなら、その背後には剥き出しの背と尻が曝されているにちがいをなく想われた。

わたしにはそれが不安だった。或は飛ぶ鳥が鋭い嘴でついでみ血まみれにしてしまうかもしれない。すでに、してしまったかもしれない。

或は彪が。翼の生えた彪が今、果ても無い海上に休む場所をさがしてわたしの血まみれ

の尻に足をつけるかもしれない。一点にかかるそのはばたく巨体の全体重がわたしを彼ごと沈めて仕舞うに違いない。すでに、しずんでしまったのか？

そして見ていたに違いなかった。省みることもできない上空の高みに不均衡にひらいた二つの眼が、ひとつは煌めき、燃え上がりながら、ひとつは色あせて干からびながら、その笑うしかない悲劇の一部始終を。今も見続けていたに違いなかった。

わたしはそれが皮膚を掻きむしるようにも恥ずかしかった。

眼を開くと二つの光の線が斜めに停滞していた。

かがやく。

その時に、その光以外には暗闇であることを知った。

つぎの瞬間に、醒めた眼が今、遮光板の閉じられた機内の暗闇を見ていたのを知った。

もののかたちが、色を伴って暗く眼差しに見とめられていた。

朝に違いなかった。いくつか、ほんのすこしだけ開かれた遮光板の投げた光が鮮明なまばゆさを、ほそく、そこにさらしているのだった。

わたしは瞬いた。

傍らに姉妹はそれぞれ反対を向いて寝ていた。窓際の蘭は窓の方を、傍らのタオは私の方を向いて、その一瞬に私がタオに感じたいじらしさはなぜなのだろう？ いずれにせよ無防備で、そして空港に着いたら彼女は化粧直しに追われるに違いなかった。

わたしは彼女たちのとじられた顔の正面に、遮光板に手をのばした。指先に、それがふれた。

その時、すでにわたしは開いた向こうに燃え上がっている空の紅蓮の焰が見えるに違いないことを知っていた。オレンジと更に白みががったむらさきさえもが瞬時瞬時にはためく。

灼熱の？…狂気、と。

それが気ちがいの妄想で、まさに私がそれにふれていることに気付いていた。

わたしは遮光版を薄くあげた。

その瞬間、わたしは目を閉じていた。

まぶたに直射する光が、温かみも無い儘に温度を伝えた。

顯らかに朝だった。空は青く、ひたすらに、絶望的なまでに青く、下に雲のすさまじい奔流の、あくまでもかたち崩れない静寂を思った。

わたしはシートに持たれた。

眼を開き、コーヒーかお茶かをチョイスさせようとするアテンダントに対応し、二人を起こした。朝ご飯はなに？

飛行機、の？

日本食、アジア風の食べ物、撰べる…どっち？

それ、日本語で、何て言う？

機内食？

きないそく…

タオは二度口の中で繰り返し、そしてベトナム人のアテンドにベトナム語で尋ね、姉妹の分としてアジア風のものを選んだ。

聴て機体が地上を踏んだ一瞬に、タオは私の膝をつかみ、振り返もせずに行った、…綺

夜宇、…と、ただ前の方を見た儘、覗き込むようにして、そのくせ眼以外のかんかくのすべてで日本を感じとろうとしながら、——来たよ。

タオはささやく。

——日本、来たよ。

タオはあきらかに、心の底まで歓喜に染まった。

羽田だった。

到着ロビーを入国審査に歩きながらタオは顔を青醒めさせ、トイレを探した。

長い間そとでわたしたちは待ち、一度出て来たタオはわたしたちの顔を見るまえにすぐさま踵を返した。ふたたび日本人の女とぶつかりそうになりながら個室に駈けた。

踵を返す一瞬に、目を剥いたタオの眼差しの焦点のない色がわたしの眼には残っていた。ややあってタオはうつむき、はじらいながら出て来た。

——体調悪いの？

——悪くないよ。

その手をとると明らかに冷たかった。

——風邪？

——かな？

——熱は？

——ないよ。

入国審査は別々だったので、タオたちの外国人口の前で待った。

出たすぐの階段の近く、手摺にもたれて一階下のロビーを見た。日本人たちの声が聞こえた。なにもかもが日本だった。床タイルを剥したスラグの鉄骨にへばりついた鼠の糞尿さえ日本だったに違いない。わたしはすでに倦んだ。荷物を先に、取りに行った。

ややあって蘭が先に出た。

蘭は私を見て一瞬、笑った。すぐさまに彼女は失語症に戻った。その顔の色さえも。

おくれてタオは右手の隅から出てきて、そしてわたしの前を素通りしかかった。私が聲を掛けると、——いたの！

タオが派手な、媚の過剰な聲を立てた。

——待ってた。…荷物も、先に…

そして

——いたんだね！

わたしはかける言葉もなかった。軽い興奮状態のタオに笑んだ。

——そこに、ね。いたんだ、ね！

蘭は一階下のフロアを覗き見るばかりだった。

階段をおりた。タオが欲しがった JR の外国人パスカードを取りにいかなければならなかった。そのロビーをそれとなく眼差しがさがす背後に、タオの声があった。

——綺夜宇さん…

みみもとでささやいたように。

振り返った。

ややはなれてタオがひとり立ち止まり、ただひとり身をわずかに痙攣させていた。

わたしを見ている目が、顯らかにわたしをみてはいなかった。

傍らに蘭が鼻をすすった。
その音を耳が聴いたことに気付いた。
——だめだよ、綺夜宇さん…
タオのなにも見ない眼がただ純粹に怯えていた。
タオが口をおおきく、あの形に広げた。
こまかな痙攣以外にもとから動きの無かった身体が、はっきりと動きやめて見得た。
恠しんだ。
わたしは、タオが失禁したのに気づいた。
ワンピースの下の素足の太ももにその液体は妨げるものなくしたたった。
タオの失禁がすべて終わった時、傍らに寄りわたしは云った。
——どうした？
——わたし？
——大丈夫？
——何した？ わたし？
——大丈夫、…
——これ、なに？
——なに？
——日本語で、なに？
——もらした…
——もらした…
タオの唇が復唱しかけた時、私は彼女の手を引いて立ち去った。タオは床の上に小便のたまりを残した。わたしの知った事ではなかった。
トイレに連れていき、タオはわたしへの羞じらいで目を泳がせながら、遂に言い訳の言葉も思いつけない儘唇を動かした。鞆を以て彼女はトイレに入った。
蘭はなにも云わなかった。
蘭はトイレの入り口の近く壁にぴったりと背をつけて、そして私を見ていた。
トイレに入る女のほとんどが、それぞれにわたしに眼差しを送った。媚びた、羞じた、それら。家畜じみて自虐的な。
長い、一番ながい時間があって、タオは出て来た。
其の時にはすでに、彼女の唇は痙攣をやめることができなかった。
——風邪ひいたんだよ。
タオは云った。
——病気になった、ね。空港、ひと、いっぱいだから、ね。
ささやく。
——日本、うれしいのに、病気に、なった、ね。
私は何も答えずに、ただ彼女の爲にだけ笑んだ。
すでにわたしは彼女を、ただ、いつくしんでいた。
成田エクスプレスに乗る前にふたたびトイレに入った。
唇の痙攣が已まなかった。
吐いているに違いなかった。

車両に乗る前、タオが私を呼び止めて云った。

——もう大丈夫だよ。

——なに？

——もう、もらしたしないよ。

——もらした？

——さっき、ぜんぶ出た。

言って、無理やりタオは笑った。

シートの中でタオはその窓に過ぎ去る田園風景をもはや見る余裕さえなかった。曇り空の白濁の下のあまりにも穏やか過ぎた色彩。そのこちらにタオは薄く閉じた瞼にかすかな痙攣をあたえてシートに深く靠れるしかなかった。

口の奥に、喉を何度か締め付け、喉に喉を噛みつかせているかのように、それ、頸筋の皮膚がうごめくのわたしは時に見た。

此の時、わたしは彼女の異変の理由を知っていた。精神的な理由だ。事の詳細は彼女の爲に、あなたには言わないでおく。後にわたしたちが見る《変化》とはかかわりのないものだと思う。違うかもしれない。わたしにもわからない。

東京駅で乗りかえるに、彼女はシートに埋もれたままに行った。

——さきに、行って。

——なんで？

——歩けないよ。さきに、

——それは無理だろ？

わたしは云った。彼女に手助けしようとしたとき、タオは自分で立って自分で歩いた。腰を抱いて、タオを連れた。タオはなんだか不自然に立ち止まり、そのつど私たちは人にぶつかり駆ける。

わたしたちの周りに不審の気配が匂うのは明らかだった。それも又タオを追い詰めるには違いなかった。

駅でトイレを探した。

タクシーで新宿へ行って、そのままホテルに入った。タクシーの中で、短くはない時間の中にタオは運転手に流暢な日本語で自分のことを話しかけて倦まなかった。彼はタオが憧れの日本再訪に歓喜する、軽く躁がかった南国女性の陽気と思ったに違いない。わたしはタオの笑い声を聞き、その話声を聞いた。

時間はすでに三時を過ぎていた。

チェックインのフロント前でタオは一変した。レセプションに彼女は明らかに、初歩の日本語さえしゃべれない初学者のしどろもどろを公開した。

レセプションの女はタオにいたわりの微笑をくれた。彼女にはそれ以外に術はなかった。彼女はあわれな、過剰に緊張した後進国の貧しい女を見ていた。彼女はすでに憐れみと慈愛の人になりおおせた。

部屋の中で、タオは私がルームキーを差し込む前の暗闇にトイレを探し、そして籠った。嘔吐する醜い息が聞こえた。ドアのむこうに空気さえ荒ららぐ醜えた気配があるような、そんな実感がわたしの鼻に芽生えた。

ややあって、シャワーの音が聞こえた。

わたしはベッドに身を投げた。
タオが一度窓の外を見た。
しばらく見、確認するようにも見、振り返りかけ、再び見、振り返りかけ、見、遂に振り返って、そして、蘭は聲のないまま唇とほほでだけ笑った。
臆て飛び込むようにベッドに身を投げて、軋んだ寝台に私にからみついた。
蘭は腕に、腹に、太ももに、わたしの体温を感じた。
蘭は目を閉じた。
耳を澄ましているようにもわたしには想えた。
シャワーの音が止まって、纒かな時間があって、タオがバスタオルで体をふきながら外に出た。絡みついて眠る蘭をは放置した。むしろこの時にはタオは落ち着いていて、彼女は髪も洗ったようだった。
——日本だね…
ドライヤーで髪を乾かしながら、そしてタオは鏡を見ながら言った。
テーブルに投げ出されたバスタオルが、零れ落ちる寸前に垂れさがっていた。
——うれしい？
タオは云った。
わたしは斜めに刺す曇りの日差しに半面を翳らすタオの後姿を見ていた。
なにも答えなかった。
——うれしいね。
タオはわたしの爲にささやいた。
——綺夜宇さん！
いきなりタオが叫んだ。
ドライヤーを止め、振り返りみて、敢えて自分の胸をつかんで云った。
——太った？
と、わたし、太った、ね。
陽気に、喚くように言ったタオにわたしは笑んだ。
髪の未だ乾かないままにタオは私のかたわらに横たわり、片肘にのぞきこみ、覆いかぶさって、そして以前日本にいた比の思い出を語った。いくつか、すでに聞いた話も交えて。
空港からこのかたの彼女の変調は影も無かった。日が沈みかけたころに、わたしは彼女を抱いてやった。
蘭が、そのかたわらに姉に添うように、そしてその頬を時に撫ぜた。自分が姉であるかにも見せて。
タオを外に連れ出す気になれなかった。
ひとりで外に出、コンビニでパンを買って遣った。
日本で連れまわす以上、彼女は本当に崩壊して仕舞うに違いないことをすでにわたしは予感していた。
それを防ぐ気も、煽るきもなかった。
部屋の中で、服も着ずにようきにさわぐタオをわたしは見ていた。
タオが云った。

——シャワー、浴びて。

笑い声と共に。

——綺夜宇さん、つかれてるよ。だから、あびたほうが、いいよ。

私が云われるままバスルームに入って、そして出て来た時、彼女はすでに寝台に寝息を立てていた。

疲れ切っていたに違いないことにわたしは気付いた。

時間にして八時半程度。

蘭は小さなソファ雙つの、その一つに座ってわたしを見ていた。

髪をかわかし、わたしは部屋を出た。蘭に、朝まで待ってろ。それだけ伝えて。

(以下は下に別記)

○

2019.09.16. メール

(本文)

嘘をつくわけじゃない。

とは言え、すべてを語り盡すことは誰も、誰に對してもできない。

あなたが私が嘘を、必ずしもついたのでないことを知れば、或はそれでよい。

(ファイル)

十四日の朝に、日本についていた。

タオと蘭を連れて。

タオは蘭に日本を紹介するのに夢中だった。

そして蘭は姉の前で、その固有の失語症を曝し続けた。

此の日、何をしたというでもない。

空港を出るまでに時間がかかり、更に成田からの長旅に時間がかかる。

成田エクスプレスの窓越しの風景に、タオが云った。

——ここ、東京？

彼女は前回、兵庫にいたから成田は初めてだった。

わたしは千葉だ、と言った。

——東京じゃないの？

——近く。

答えるわたしにタオはそれでも訝しげだった。不思議なものを見るような目をした。

その窓の向こうの鄙びた風景に。

新宿のホテルに着くとタオと蘭は早く寝た。

その夜、わたしは部屋を出た。

歩いた。

いずれにせよ、そこは東京だった。

深夜三時近くに花園神社に入った。境内を通り、裏の、ゴールデン街近くの、樹木の影の平屋に入った。所謂隠れ家風の居酒屋。個室の店だった。入り口に出迎えた受付の女が、背後の小さな噴水の水のきらめきに後ろから騒ぎ立てられながら、わたしに笑んだ。
——予約の、林さんのところ…

——林様…八郎様でいらっしゃいますか？

予約帳も見ずに名前を言ったレセプションの素直な顔に、わたしはその名前の憶えやすさに手落ちを感じた。あるいは覚えやすくとも忘れやすいだろうか？あるいは、中橋基明だの安田優だの方がよかったのではないか。少なくとも数字つきの名前は記憶に残りやすくも思えた。

女の胸にすこし盛りあがって光を反射するネーム・プレートを見た。高橋かすみと書いてあった。二度確認し、顔をみたときに、女の顔にあからさまな矜持の色が生まれてあり、そっと彼女の媚びを隠していたのに気づいた。わたしは自分の眼差しを羞じた。

高橋かすみがあらためてはっきりと笑んだ。彼女に自分の女への自信が匂った。

——そう、…もう、います？

——ご予約は三名様ですよ？

——そう。

——二名様、もう、お待ちです。

高橋かすみが通路の竹のオブジェの翳りを潜りながら、その個室に先導した。

彼女の聲かけのあとでおびたしい椿の斜めにながれた衾をひらくと珍珠本穂埜果と嘉鳥螢嗣が向かい合って座っていた。天井の極端に低い室内。いかにもせまく、あまりも瀟洒に飾られた押し入れの中に押し込められた気がする。嘉鳥のとなりに座った。

ふたりはシャンパンを飲んでいた。ヴーヴ・クリコ Veuve Clicquo、ふつうの、オレンジ色のラベル。

嘉鳥の好みだったことを思い出した。

わたしは思わずに笑った。

言った。

——相変わらず、…

嘉鳥、

——なに？

——相変わらず、それ？

——前は…お前がいたころはクルグ Krug じゃない？…本当はモエが好きだった。…でも、あれ有名すぎて…あれから、日本酒にも行ったけどね。

——そう？

——でも、炭酸入ってる感じの方が…お前は？ ひさしぶりの日本酒？

——同じでいいよ。

——久しぶりの挨拶もせずに、酒の話から入る。…ま、俺たちっばいかな。その横道に外れた感じ、ね。

嘉鳥は笑った。

給仕係があたらしいフルーツ・グラスを持って来るまで、私たちは取り立てて何を話すともなかった。

玖珠本がグラスにヴェーヴを注いだ。

——久しぶりでしょ。

玖珠本が云った。そのささやき聲のやさしく、あまりにも親しい気配が嘉島にふたりの関係を思い出させたに違いなかった。

——そう…ね。

そう独り言散る声をわたしは耳の横に聞いた。

——シャンパン？

——あっちにもあるの？

——あるよ。だれも買わない。飾られてるだけ。お金持ちの、いけすかない外国かぶれの人間だけが買う。

嘉島が云う、——こっちと一緒か？

そして自嘲して笑い、——もっとひどい。お前、老けたね。

嘉島に言った。

——年相応。立派なアラフィフってやつ。知ってる？ アラフィフ。今の日本語。

——いたころから使ってた。アラサー、アラフォーだろ？…くだらない。

——お前は相変わらず、…波乎が云ってたぜ。

——なんて？

——彼が部屋に飾ってるお前が残して行った自画像だけが老いさらばえてるって。

——話つくるな。ワイルドなんて興味ないだろ？

——逢った？

嘉島はテーブルの上の私のグラスに乾杯して、そういった。

——あの人？

——波乎。

——まだ。

——逢って遣れよ。

——逢うよ。そのうち。放っといても…どう？

——波乎さん？

——彼女、…

——變りようがない。…

玖珠本は笑う。

嘉島がささやく。

——どこまで聞いた？

——テロ？

——みたいな。

——あらかた…

——来年のオリンピック。開幕の式に会場にタブンを撒く。

——匂いはOKなの？

——変更した。別に。いいかと。あの教授がいろいろやってたけどそもそも…

——匂い自分で嗅ぐわけにいかないからね。

——あの教授、上物作り過ぎるんだよ。それで、そのままいいんじゃない？ と。

——試作はためしたの？

——おそらく無味無臭。たんなる突然死で片づけられた。異臭騒ぎなし。

——すさまじい人権侵害だな。

——そんなものもとより信用してないだろ？

——人権なんてフィクションにすぎない。誰も、いかなる国家もそんなもの尊重したことも無い。なんらかの具体的な権利を付与しただけ。いつの間にか命の尊厳などと言う抽象的な神話になった。権利にはさまざまなかたちがある。故に、本来人の死を厭う権利はそもそも誰にもない…それで？

——時間差で、その明け方に吹っ飛ばす。

——聞いた。東京タワー、スカイツリー…

——根元からね。荘厳だぜ。次、

——皇居と首相官邸？

——朝にね。全ての注意がスケープ・ゴートの三つに注がれたときに。それから自民党本部爆破。もろもろの国会議員の屠殺。国会議事堂を占拠。

——天皇及び首相の銃殺。又そのインターネット中継。

——国旗を焼く…象徴的な、ワンカットだよ。…莫迦でもなにが起こってるのか気付く。

——国内制圧の宣言。

——ちょっと違う。現状の無政府状態の宣言。

——自衛隊は丸腰になる…政府も天皇も存在しない場合、總ての軍隊・自衛隊・警察機関は単に違法の民間武装ゲリラに過ぎない。

——新国家樹立の宣言…舊議事堂直下の無限に純粋な一轉たる消失轉をのみ国家領土とみとめる。故、それ以外は剥き出しの原野に過ぎない。

——領土の無い…正確には限りなく純粋な一点に領土を置く地上に存在しない、かつ、明らかに存在する国家の樹立。

——新日本神國、…とね。神の字と國の字に ☉ をつけた、…ね？

——新にも日本にもつけとけよ。ともあれ、さしあたりお前らはその国民だと。所謂「国民」の自由登録制。公的サービスの完全自由化…即ちファンド化…

——いや。そこらへんは、どうでもいい。その実務に関しては、…

——取り敢えずのもので、いつ暴動が起ころうが新たなリーダーが生まれようが知った事ではない。

——そこまで過保護にしてやる必要ないんだよ。むしろ抛ったらかしで。新しいシステムは誰かが作るだろう。様々にね。だから、むしろ新しいプランでは無政府宣言の後に我々は撤退する。…綺麗にね。この無領土国家はあなたがたのものだ。あなたがたが貴方がたによって統治せよ、と。

——外交…外国はどうするの？

——入って来れないだろう。そう予測する…だれが不可解な未曾有の火の附いた爆弾に触れようとする？ 黙ってしばらく静観するしかない。おそらくさしあたりは民間と各自自治体でなんとかしようとするだろう。自衛隊だって、それこそ主と国家のない自営自衛團…他者なるひとらを勝手に守るのだから他衛團になるだろう。いずれにせよすでに国家単位で大きく機能していた各ライフライン、各制度等は自治団体を超えて働くので…

——そこであらたな集合と分離がはじまる？

——例えば犬の頭を斬り飛ばして命を与えたようなもの。頭脳は無数に各所に自由に生成されるだろう。その時に舊- 犬身体は予想もしなかった変容をとげざるを得ない…これは実験だ。結果に我々が関与すべきではない。

わたしは聲を立てて笑った。

玖珠本は襖の方を見やった。

嘉鳥はささやく。

——たとえ聞いてもだれも本気にしない。よっばらいのたわごとだとね。記憶にさえ残らない…

私は云った。

——お前がひとりで考えたんだろう？

——俺？ アウトラインだけ…基本だけ。基本的な考え方…

——基本？

——存在論と倫理学…たとえば哲学、形而上学、論理学、ともかくも存在にかかわる思考を存在論、倫理にかかわるものを倫理学とする。その二つに目的や真理をではなく実験の要素を与えただけ。実験を基盤とする。

——思考とは究明ではなく実験である？

——そう。そうすると、

——ニイチェっぼね。

——まず命ある儘頭をちょんぎる実験が一番有効だ…国家論に関してはね。

——国家は如何にあるべきか、国家というシステムを超えた、ないし別種のシステムとはいかなるものか、そんなものは本来どうでもよい。

——自由な実験の爲に実験の土壌としての原野を切り開く可能性がある。

——あくまで、既存国家の上に。

——だから、

——日本を破壊する。取り敢えずは…落ち着いたら、次は、…

——アメリカ？ 中国？

——北朝鮮とか？ それは後に状況を見て精査しよう。

——よく考え付くよな。

わたしは笑う。嘉鳥は応えた。

——波乎だよ。

——彼女が？

——比呂を見て…モデルはあの美しい身体だよ…あれをみて思いついた。彼女は一つの実験を生きてるんだな、と。

——俺たちの本性と同じように？

——実験者なき実験。観察者なき試験管。そもそもいかにしても人格神が存在しないということはそういうことだ…

——プラナリア見ても思いつけたんじゃない？

——ダメだろ？

嘉鳥は笑った。

——あんなもの、彼ほど美しくない。

——ハオ・ラン…

わたしは何と言うでもなくあの人を思った。

玖珠本は云った。

——いずれにしても、身体がすべてを決定する。もろもろの諸限界そのものを。AIが人間になれるかって議論があるじゃない？ あのくだらなさってそこでしょ？ AIに知性が存在し得たとして、その知性は人間のそれと異なっていなければならない。果たしてAIは笑うのか？ ともあれ、AIの笑いは口がわなないて肺が息をはくあの笑いとは別の身体による、別の風景の中の、別の出来事に鳴らざるを得ない。今言うAIの知性はAI固有の身体なき架空のフィクション、乃至、ヒト型身体の粗雑な模造品にすぎない。

——かりに、と。

私は言う、——デジタルヴォイスが人間より美しい笑い声を発し、レオナルドより美しいモナ・リザを書き上げ、ジェームズ・ブラウン以上のダンスを踊っても、…

玖珠本は私を見た。

つぶやく。

——彼等の身体は、我々の身体とは違う別の者だ。我々は理解しないだろう。不可能だから。鳥を見ても、鳥の見る風景をは決して見なかったように。

私は玖珠本に言った。

——お前はすぐに賛同したの？

——賛同？

——嘉鳥に。

——賛同とはちがう。みんなもそうだよ。それぞれ違う風景を見出してる。同じ景色にね。俺、本来、平和主義者なの。3.11. 覚えてる？ 燃え上がるツインタワー見て、なんて人間、馬鹿なんだろうって思った。で、宗教というものを考えた。単に茶番というだけでそれだけが戦争の起因ともいえない。国家というものを考えた。国家とは何か？ ナショナリズムか。ナショナリズムが戦争を保証するのかと。ナショナリズムとはなにか？ 国体主義か。だから、俺、國體ってのから国家を考えた。とはいえ、國體が云々されるとき、かならず國體とはなんぞやの論争が起こる。明徴論も器官論も國體とはなんぞやの議論に過ぎない。つまり、國體の実態は終に存在しない。…当たり前だけどね。次、貨幣。でも考える。例えばベネズエラで国家貨幣が紙くず如何になっても国家は存在するだろう？ ドルやらなにやらを流通させてね。貨幣は国家の形を保証もせず限界づけもしない。また、今や多くの企業は多国籍化する。経済は時に国家すらこえる。次、言語。これは言うまでもない。単一言語の国家のほうが珍しい。次、領土。実は国家の根拠はこれしかない。結局は獲得された領土こそが国家の存在理由に過ぎず、国家がそんざいするから領土が存在し、領土を死守するシステムにすぎないのが国家であり、そのシステムはその用を足せばじつはなんでもいい。国家とはいわば戦争装置に過ぎない。領土があるから戦争があり、戦争があるから領土がある。故に国家は、実はかろうじて存在してゐる。具体性すらなく、ね。常に可変する基礎工事の無い掘立小屋に過ぎずにね。戦争の無い世界を作ろうとするなら、国家という在り方そのものを破壊しなければならない。わたしは玖珠本に言った。

——國體論、…明徴論に天皇機関説？…今更？

——今更。実は非常に、今なおも重要だと思える…俺は、ね。なにもそれらが論旨としていまでも有効な問題系を這わせているなんて言っていない…大日本帝国の戦争はナチズム・ドイツの問題とは差異する。思うに、それはより複雑な問題なんだ。それは悪しき政府とその国民洗脳、言論統制の問題じゃない。もちもんいまの政府公認たる所謂反自虐史観論者の片棒を担ごうと謂うんじゃない。多くの場合、日米開戦は国民感情それ自体には待ち望まれていたことは多くの資料が暗示する。治安維持法維持法自体、天下の悪法と謂われながらもそれが本当に不当な悪法として存在してゐたのだろうか？ 時に北の巨大な國體が十月革命を体験する。これは日本の知識人たちが単に論理としてのみ知っていた言の文字通りの具現化に他ならない。架空の書物がある日ドアから入ってきて露西亜語でこんにちとは云ったのさ。その前には辛亥革命もあった。それに関しては多くの日本人も関わる。そもそも大日本帝国は海の向こうの亡命革命家達の吹き溜まりとまで化している事実もある。孫文しかりファン・ボイ・チャウしかりエミリオ・アギナルドの一統しかり。更には 515 事件乃至 226 事件の発生を見る。226 事件にしても農村問題が背景にある譯であって、ニイチェとマルクス片手の胡散臭いカリスマ文士の羊水の中に育とうが何だろうが彼等が本来皇道派一派の蜂起だった以上、状況としては内から外から周縁からも既存国家は揺れ動かされる。既存国家は自己免疫として免疫力を強化せざるを得ない。…いずれにせよ、さまざまな状況の中で、悪しき独裁者の悪しき独善なくしてその大日本帝国の所謂犯罪的行為は始まっている。…ヒトラーを戴いたナチズム、ムッソリーニを戴いたファシズムの反省をドイツ人とイタリア人がなすことはたやすい。けれども、大日本帝国の國民たちは、だれも独裁し得たわけでもなく独裁された奇妙で鮮明な夢のような現実の中にあつた爲に、結局は反省も総括さえもできない。…これはもっと複雑な、国家というものそれ自体の根本にかかわる問題に想える…だから、未だに我々はそのさまざまな資料をあたることによってしか国家論を思考しなければならない。

その愚劣と、矛盾を…

ついでに言っておけば俺はナチズムもファシズムもなにもそれ自体を以て悪と呼ぶ錯乱はしていない。存在論と倫理学は差異する。まったく別の者であって、存在論の領域に倫理を語り始め、倫理学の必然にすぎないものに存在論的事実を見出した時、それはいかにして宗教となる。宗教とはいかにしても錯乱の同義たることは論を待たない。存在論的真理は決して倫理をはもたらさず、ある集団の治安維持の仮定的かつ過程的法に他ならない倫理学は決して真理として存在しない。それをはっきり意識した二人の人物がいる…倫理学者孔子は決して存在論的には語らなかつた。仏陀の残した思考集団はあくまで方便として語つた。存在論と倫理学の区別のない人たちに向かつて、いわば取り敢えずの方便として、と。つまり彼等は存在論と倫理学の共存できない乖離を理解していた。臆て俺たちが土壌を与えるあたらしい政治がナチズムに近くなろうがファシズムに近くなろうが、そうだったとしても、それはそれでそれ自身の倫理体系の裡で活動すればいい。そこまでの興味は俺にはなく、また、行使すべき権限も無い。

○

片岡比羽犁へ

(2019.09.18. メール)

(本文)

おはよう。

何日か前、あなたの言ったようにたぶん僕はもうあなたにも、僕自身にも飽きているのかも。

思う。あなたはいつでも正しいと。

ただ、心と心の触れ合いの爲に、…もはや肉の交わりになど意味を見出さない永遠の僕らの、心の爲にだけに。

あくまでも酔いつぶれて見上げた空に幻見た詩のようなもの。

清雅

(ファイル)

一昨日の朝…15日の朝。わたしは花園神社の樹木の翳りの下に正気付いた。

その時に、初めてわたしはほんの数秒の…綺夜宇の発作に居たことの気付いた(あの、すでに棄てられたベトナムの姉妹が私を讀んだ呼び方は、訛どころか全く正しかった。それに気付いた。彼女は呼んだ、狂と)。

事実そうだった。まったくのところ私自身に他ならない古への阿憂迦の王はその在りもしなかった99人の兄弟殺しの、百に足りないあと一人の殺しの成されなかったことを悔いる熱い滂沱の涙の中に足元にさざめき立つ死者たちの崩壊した形の肉の飛散を見ていた。

ほんの、須臾とも言えない一瞬のうちに。

玖珠本も嘉鳥も居なかった。あとで合流した緋川も。

時間にして6時過ぎなのか。

樹木は長い影を絡ませて、ただ地表に形態の渾沌をだけさらした。

浩然に逢いに行くはずだった。

約束があった譯でもなく。私が波乎に逢うのは事実だった。

タクシーを止めた。

一番町に走らせた。運転手が何か話しかけているのは知っていた。それにわたしが受け答えしているのも。それは陽気な聲だった。それらの言葉の群れは結局はわたしに一度たりとも聞き止められなかったので、まるで一度も存在しなかったかのように已に忘れられてしまった儘だった。

まばたきするうちにも思われた。

未だに朝が朝にすぎない朝に、千鳥ヶ淵のかたわらのその古いマンションの前に立った。

斜線制限の、斜めにギザ着く頭のカーブを見上げた。

運転手がわたしの傍らに来て、金を要求した。わたしは一銭も持って居なかったので、待って居ろ、といった。彼は素直に従った。場所とマンションのご威光に彼は従った。

13階の彼女の部屋の前に立つと、そもそも彼女が在宅なのかどうかもいぶかられた。ネームプレートはなかった。十年近くの昔の儘に、彼女がいまだに茲にいる必然もなかった。ノックする迄も無くドアが開かれた。

隙間に褐色の、せの低い少女が笑っていた。豊かすぎる髪をひっ詰めて、できそこないのしっぽの鬘を結びこんだようにも見え、そしてまるで昔からの顔見知りのように笑む。本当に小柄で、150センチもないに違いなかった、その癖に顔には明らかに成熟しかけの少女の媚びがうざったいほどに散った。

とみこう見する迄も無くに少女はわたしが其の人だと確信したに違いなく、ドアを完全に開けるとそのドアの向こうに隠れ、顔だけ出した目に上目の眼差しをくれた。

わたしが彼女を見ると、少女はちいさな「き」音の笑い声を一度だけ喉に立てた。

私は目を逸らした。私を見つめ続けた儘の少女の過剰なはじらいがわたしの皮膚に棘をさした。

通路をまっすぐ行くと、開かれた居間の奥の波乎が立っていて、レース地のカーテンに煽られていた。あわい逆光に、当然のこととして彼女がその身の産毛の一本にだに十年の経年を刻んではいない事が知れた。広大な居間を狭く見せるほどの鉢植えの植物の群れは複雑な匂いを重ね、百いくつとしれない極楽鳥花の花がけばけばしい程の蜜まみれの百合の芳香を籠らせる。

振り返りもせず波乎は云った。

——いくら？

わたしは応えなかった。波乎がなにをいっているのか判らなかつたから。

——タクシー代、いくら？ 払ってないよね、お前…

——なんで、…

——下、見たら？

傍らに添うた時に、彼女の体臭が匂った。

——ほら。

言って笑い、波乎のそのかすかな頬の震えはいよいよに体臭を散らす。雨に濡れた獣の柔毛のような、その、容姿にいかにも不似合いな悪臭。

——いくら？…

波乎は

——どこから？

振り返って少女に下を指さした。少女はうなずいて、小走りに消えた。

——適当に、拂っとく。

波乎は謂うと、私を見上げ、しばらく見つめ、そして聲を立てて笑った。

私のシャツの腕を指先で刎ねた。

言った。

——気を付けて…

笑む。

——花の花粉。

頭一つ分以上も低い彼女は、至近に顎を上げ、そしてわたしの唇に触れた。

——来いよ。…僕に逢いに来たんだろ？

思っていた通りに、そしてそうでしかあり得ない必然の許に、彼女はあの十六、七歳の儘の貌ちを私の目の前に曝し、さまざまな記憶を喚起しながらも終には何らの状ちをも結ばせない。

鉢植をかいくぐるように、左手のルーフバルコニーに出た。

バルコニーにも夥しい鉢植えが緑とそれぞれの花の色を散らし、とりわけて抜けた空の下にも百にも近い極楽鳥花は匂いを籠らせた。

——ストレリチア？

わたしは白い鐵のテーブルセットの椅子を波乎の爲に引いてやった。

——あいかかわらず。気が利くね。日本人の男じゃないね…彼等の気の利かなさはすさまじい。

波乎は笑う。

——あれ、なんで？ 女に甘やかされてんじゃない？

——そういう無能さが好きなんじゃない？

——そうでもない。…彼等のもとにあるのは…なぜだろう？ 父の意思を継いだ？

——父？ 黄？…血のつながりも無いくせに。…そもそも、彼の意味なんて気に掛けたことさえないじゃない？

——あるよ。たまには。今だって、…

——嘘。

——ストレリチア・ドゥルガ *Strelitzia Durga* …變種、というか。極楽鳥花って、アフリカの方の花じゃない？

これはインドの方の…たぶん、自生化した後なんかの拍子に自然交雑された變種…なのか、気候によって変態乃至進化したか…そんなに古い花じゃない。ここ数年…

——好きなの？

——だから、ドゥルガ。知ってる？ ヒンドゥー教の神様の名前。…あっちの方の新種だからね…虎だっけな？ 獅子だっけな？…に乗った美貌の女性神。シヴァ *Siva* 神の妃で、戦の神…花の土台が黄色っぽいでしょ？ 黄色…そして赤を経ずいきなり紫に變り、遅れて跳ねあがる朱に至る…上に赤と青と白の翅をつき拵げて…その状ちが虎に乗る女神ドゥルガに似る、とね？

——極楽の破壊神、と。

——笑うね、なんか。匂いがすごいでしょ？

——胸やけしそうだね。

——お前もね。ただ、此処にあるのはもうすぐ滅びるね。

——滅びる？

——冬は越せない。中のはともかく。バルコニーのはね。三度四度でもう駄目じゃない？ たぶん、十二月あたりには死穢の群れてね。

——助けないの？

——中のはね。…ま、放っておいてもたすかる。阿虞邇が室内管理してるから…

——ここのは？

——それはそれで宿命じゃない？ あるいはこれだけあったら冬の雪の中にも中にも咲くストレリチアが生まれるかもしれない。百近い花の一つからね…ひょっとしたら、雪に

擬態した純白のストレリチアが。ただ、阿虞邇は悲しむ。

——阿虞邇？

——そう…此花を運び込ませ始めた比に、うちで拾った…

——誰？

波乎は右手に手招きした。

さっきの少女が窓際にあて、そして見蕩れたまなざしを波乎に投げていた。雪崩れるように少女は駆け寄って、波乎の膝の上に乗った。

自分の胸をよせ波乎の頬を包もうとしながら、その反り返した背にその豊かにすぎる髪は見苦しい程に亂れた。

私を見詰めながら波乎はささやく。

——阿虞邇…此の子。…実名は…なんだっけ？ 忘れた。ネパールの人だよ…密航者…例の外国人実習生のあれで、何年前に母親が日本に来たらしい。それが、日本で行方不明になったとか。逃げたのか、それとも何とかかんとかなって仕舞ったのか…海の藻屑か山の樹木と虫ども餌か。陸で日本の莫迦な男の慰み者かとね。…密航のルートは知らない。なんらかのネパール人コミュニティがあるんじゃない？ SNSのご時世、ないわけがない。それでなんとか飢えもなにも凌いでたのかな？ それで彼女、結局ある日本人に取っ捉まって、ある工場に売られた。

そこで違法労働やらされてたんでしょ。事の次第がどうなったのかは知らない。実際、これ等は推察でしかない。阿虞邇は何も語らない。僕が彼を知った時には阿虞邇、とある千葉の変態さんに軟禁されてたよ。文字通りなぐさみ物の性奴隷としてね。変態さん、ずっと布地ぐるぐるまきにして口枷してたみたい。…そのせいかもしれない。歯並びが歪んでる…脱いで、と。

波乎は阿虞邇に言った。

そして彼女を立たせると、もう一度、——脱いで。

わざと阿虞邇が判らないふりをしたことが分かった。彼女は小首をかしげ、——何？、と。無言のジェスチャーをする。

波乎はその頬をつねった。

——こら。

ふたりは笑う。

阿虞邇はあくまでも聲を立てない。ひらいた聲で無言に笑う。

——此の子…

わたしは言う。

——話せない？

——舌がない。…日本でされたのか、故国でされたのか、それまでは知らない。…件の変態君はしてないといい、まあ、そうなのかな？ 日本の工場主だってそんな必要性も無いはずなので…どうなんだろう？…判らないな…根もとちかくから引き抜かれている。先天性の畸形ではない。

——何歳なの？

——今、十二。

——そんな年で…

——ほら、と。波乎が阿虞邇の鼻をかるく押した時、阿虞邇はわたしに媚びをはじらいに擬態した眼差しを呉れて、そして上半身の肌を曝した。

シャツを脱ぎ捨てるの間にも、その皮膚のケロイドの赤らみを焰じみて這いあがらせる肌は目に痛んだ。

私が目を奪われるた際に、少女は下のスパッツを下着ごと脱ぎ捨てた。

下半身にまで焰の虵は巻きついた。

——焼かれた？

つぶやいたわたしが自分の素肌を凝視しているのに、何を思ったのか阿虞邇は口を笑いのかたちに一瞬明け、息を吸い込む。

——焼かれた。たぶん、…オイルを塗って、火をつけたんじゃない？ 何度もね。懲罰だと変態君は云った。…らしい。緋川が、…逢った？

——彼と？

わたしの答えを待たずに波乎は云った。

——でも、嘘だよ。ライターでこんなふうには…ね？ でしょ？

其の時にわたしは違和感と共に、気付いた。

——男の子？

阿虞邇はすでにもとの自分の居場所に自分を修正しようとしたかにも、少女は波乎に纏わりついて膝に、その首筋に額をつけて私を見た。

あきらかに少女は私を誘惑していた。

——女の子だと？

波乎はかすかに笑った。

——同情したの？

——この子に？

——憐れんだ？

——とも言える…すくなくとも緋川は同情を、…そして惜しめない慈愛を彼に…でも、

——でも？

——僕は、…

——違うの？

——どうだろう？ それもあり、そうでありつつも、…綺麗じゃない？

——彼女？

——此の子…綺麗な顔してる。

——そんな能力もないのに？

——撲？

——なぐさみものにするような、そんな能力さえないのに、

——からこそ、愛は純粹に愛だ、…と。…それ、お前の言ったことだ。

——久村じゃなかった？

——そ？…同じよ。お前も、すくなくとも同意してた。

——面白いよね…

——何が？

——すくなくとも性衝動をはなれ性繁殖の必然性も無く愛が存在しうるとお前が証明した。

— そうでなければ証明は不可能である、と…

— 此の子…

— なに？

— だから阿虞邇なのか？

— 加具土命の方がお好み？…でも、彼、あっちの人でしょ？ ネパール人まで日本神話に肖る必然性はない…それに、殺されちゃうしね。お父さんに…あれ、最初の母親殺し且つ懲罰的な子殺しだよな？

— 懲罰…衝動的な、じゃない？

— 無限の喪失感の中の慟哭のうちに兆した一瞬の破戒衝動って？

— 彼等、どうするの？

— 彼等？

— 白雪。

— 破壊活動？

— テロ。

— いいんじゃない？ お前も同意してるでしょ？ 玖珠本は行ってたよ。彼は賛同したって。

— 賛同迄いかない、ただ…

— ただ？

— いいんじゃない？

— 興味ある？ 事の結果に。

— 興味は、かならずしも、ない。

— 好きだったろ？ そういうの。昔云ってた。君等の議論は在りもしない未来に立脚している時点で茶番だと。行動して見たら？ と。

— ただの放言。

— そう？

— なに？

— お前は実は、渾沌が好きなんだよ。

— あなたは？

— 撲？

— 賛同してる？

— いまの窓口、誰だっけ？

— 玖珠本。…それから、

— 久村？

— 彼、元気だよ。

— 言っとけ。是は私の血、私の肉体、…と。

— 私は復活、私はイノチ、と？

— 僕は最初から賛同も否定もしない…彼等には彼等の物語がある…

— 容認する、と。

— 容認もしない。彼等はそれを求めてもいないだろう？ だれが、時に咲く優曇華の花に容認を求める？ 佛陀の教えをひろめてよろしいかと。だれでも知っている。優曇華は

優曇華の必然においてしか咲きはしない。

——そして極楽鳥花も？

——白百合も櫻もなにかにもね。まして降る白雪、なにをかいわん。

——此の子、どうするの？

——阿虞邇？

——このまま、あなたが育てるの？

——たぶんね。彼が自分で燃え尽きない限りは…

——あなたに戀してる…

そう思わずに独り言ちるように言った時に、まるで少女はその言葉の意味を理解していたかにも私を改めて見、首をもたれかかり、そして私の爲に笑んだ。

——此の子、あなたに。

——知ってる。

——どうするの？

——どうするって？

——その、…此の、幼い気持ちは？

——僕を愛するなら止はしない。だれにも、それを止める権利はない…違う？

波乎は笑った。

——片山さんには逢った？

思い出したように波乎はささやく。

——片山？

——軍曹、と。すくなくとも嘉鳥は読んでたね。…愛称だよ。たぶん。実際の階級名じゃない。

——誰？

——何年か前、白雪に…自衛隊の人。

——聞いたけど、逢ってない。

——彼と最近、始めて在ったのね。彼、此の六月に始て此処に来た時に、面食らってた…

——あなたに？

——僕の事はもう嘉鳥があることないこと話してるもん。いまさら…ただ、花の群れとこの子に…あるいは耽美と退廃が匂ったか？

——あなたに驚いたんだよ。

——そうかな？ ともかく…

——自衛隊、…ね。

——自分の意思をもつなと教育され、自分の意志として決して自分の個人意思をは持たないともはやひとつの美学として決意した人たち…ともあれ、国家軍隊の必然だけどね。思えば国家とは飛んでもない狂気そのものと謂える…自衛隊なり軍隊なりの正常運営を正常にキープさせてる時点でね。すくなくとも民主主義国家ってのはね…いうまでもなく帝国主義の方が論理的にはつじつまが合ってる…いずれにせよ、歪んだ矛盾だからこそ生じる美学的な美しさの飽く迄錯乱した自分勝手の美に、溺れた人たちが正気付くわけ。そうしたら、…と、言いかけて波乎は聲を立てて笑った。

不思議そうに阿虞邇はそのゆららぐ顎と唇を至近に見上げた。

波乎は云った。

——彼等、まるで丸腰になった奴隷じみて僕の前に立っていた。あくまで決然と、あらたな決意と興奮を身に纏い、そして素っ裸の心細さと共に…彼等の若い子…その時に片山さんが連れてた…田村だっけな？…その子が云ってた。

——なに？

——最近、訓練で実弾発砲したんだって。転向以来何度目か、そして計画が実体化して初めての、…その時に、彼、感じたらしい。転向した当初にも感じたけれども、今あらたに鮮明に、始めて鐵の殺人兵器を発砲していると。その赤裸々に怯えた、とね。…もっと、しどろもどろに、そのくせ胸張って明確に、…ね？ 言葉を、…すこしでも正確な言葉を必死で探りながら。終にはまともに要領を得ずに無駄に言葉を重ねつつ…

——哀れかもしれない…

——哀れ？

波乎は阿虞邇の額に唇をふれ、そして、私を見ずに行った。

——たしかに。終には、俺もあなたもね。

私の周囲に無数の極楽鳥花の匂いが籠っていた。その變種の。

その匂いの向こうに波乎の悪臭が、それでもはっきりと鼻に兆す。

手を伸ばして傍らの、そのストレリチア・ドゥルガの獅子の複雑な朱のしっぽに、わたしの指はふれた。

○

(香香美から久村へ)

2019.09.20. メール

(本文)

一度確認しておこう。事の経緯を。(云々以下略)

(ファイル)

(承前)

2019.09.15.

午前。

ホテルに帰って来ると蘭がドアを開けた。何も身に着けて居なかった。そして、それを羞じても居ずに。寝台の上にタオは身を横たえて、其の儘に素肌を曝しつづけていた。時間などまるで立って居なかった様に。

タオは倦怠を抱えるそぶりもなく、そしてわたしが不在にしていた事実すら認知しないかにも自然に、横たえた身の儘にわたしに両手を伸ばした。

或は彼女の恋人の帰還を迎える、その妻の当然の身振りとして。

わたしは彼女の傍らに身を投げ、そのしがみつくの任せた。

タオはしばらくしてささやいた。

——綺夜宇さん、匂う。

——匂う？

——香水の匂い？…誰に逢った？

——香水？…

——違う…

と。云って私の襟首を指先に触れた。

——これ、なんていう？

タオはささやく。

——なに？

——花の…と。ささやくタオにわたしは笑った。

——花粉…

駅前で立ち寄った花やで、なんというでも見て回った花のどれかが花粉と、そして香水にまがわせた香を撫でつけたに違いなかった。

——かふん？

タオが身を起こしそうになった。

——可哀想

そう云った。

——なに？

——日本人、可哀想。

——何が？

——これ、花の糞なの？

と、そしてわたしは笑み乍ら彼女の額を撫ぜた。

——可哀想だね。…彼等。

ささやくわたしに、

——花は、もっときれいだよ。

タオは云った。

——もっと、…女の人より、きれいだよ。

あびて、と。そうささやいたタオに従って、わたしはバスルームに消えた。

バスルームの飛沫の中で、わたしは危うく狂気にめ醒めそうなさまざな瞬間をちらした。

ノズルが噴き出す水流が散れる肌にしぶくそのすさまじく無数の瞬間瞬間に、わたしは皮膚に無数にそれが芽生えかけて眠りに落ち、私の脳の中が瞬き続けるのを触感として感じ続けた。

飛沫は散った。

そのむごたらしいまでの無際限さが私の氣を遠くした。

バスルームから出ると正午に近い窓越しの光が物に逆光の翳りを与えた。

翳りのうちにタオはその身に添うて、唇と指に彼女の肉体の形を確認する蘭のそれ、唇も、指先も、胸元に雪崩れ落ちた髪の毛も秘かにかからまる太ももにも、ただ赦した。

タオは目を閉じるともなく向こうを見て、そしてわたしにささやく。

——今日、晴れてる？

見ている窓の向こうの雲を切らした青空の点在に、それは既に顯らかな筈だった。

——どっちだと思う？

わたしは云った。

——ひどい、ね。

笑うような聲を立てる。

——綺夜宇さんは、ひどい、ね。教えてくれない、の？

わたしは彼女の額に唇をつけた。

蘭の解き放たれた髪の毛が亂れたがままにタオの腹部を黒く汚し、白い肌の上に反射の白濁を散らした。

立て拵げられた太ももに斜めになにかのガラスの反射が蜘蛛の巣なす綺羅らぎを映した。

わたしの指先がタオの唇のかたちをなぞった。

——綺夜宇さんは、秘密にしたね。

私は応える氣も無い儘に

——今日の天気は、秘密だね。

タオの臉を見詰めた。

ふたりの終わる兆しもなく、そのきっかけさえない行爲の傍らに横たわり、わたしは何を思うでもなく壁を見ていた。壁には麻紗美の陽炎が見たことも無い子供の陽炎を付着させ、それら無数の陽炎らの蠢きの中にひと際わたしの眼に目だった。

明らかなのは、すでに私がそれ、彼等の無数の奇形の眼球の中に眼差しを得ていた事実だった。

わたしは彼等のその眼差しの一つの中に息遣っていた。

わたしは瞬いた。

天上にぶら下がった翳ろいの垂らした腸が、玉散る血の粒を無造作に拡散させながらわたしの鼻にも触れかけるすれすれに泳いだ。

或は、わたしはその滑稽に聲を立てそうだった。

腸から伸びた無数の触手が互いにぶつかり溶けあいながら、ここにはない何かを触れ取ろうとする。

そう見えた。

おそらくは私の錯誤に違いない。

テーブルに手を伸ばし、私は自分のスマホに触れた。

時に、彼女たちのそれに観光用 Sim を差し込んでやるのを忘れていたことに気付いた。

それは脱ぎ捨てられたポケットの中に眠ってゐる。

此の時に、僕は君に Line から着信を入れた。

君は出なかった。

だからタオに振り返り、私はその上半身に添うてやった。

タオは腕を絡めた。

彼女の指先が私の髪をつかんだ。

散漫な愛撫を彼女にくれた。

タオは耳たぶの近くに息を吐いた。

午後三時に君からメッセージが入っていた事には気づかなかった。

その三十分後に、君から着信があった。

君がすでにわたしの日本にいることを驚くのに、わたしが何の謝罪もしなかったのは君も知るとおり。

いずれにせよ僕たちは今日の午後の六本木での待ち合わせを約束した。

時間は夜の9時。

君は多忙だった。

故に、僕らは（…タオ、そして蘭と僕という名の僕らは）指先と唇に時間を貪らせた。

あの日の僕らの大幅な遅刻、六本木の店で僕らを一人、殆ど飲み食いもなしで待った君がその理由を追及しなかったのは、あるいは僕のそもそもの気紛れに既になれていたからか？

乃至、新宿のアルタ前広場あたりでいきなり太陽を飲み込む発作でも起こしたのだろうか？

遅刻の理由はタオに逢った。

友達と食事をする、といった時に、タオはいまだに愛撫の恍惚の溶けない上気の眼差しに、——一緒に行く。

そう云った。

わたしは笑いながら言った。

——外に出るよ。

——いいよ。

——タオさん、大丈夫？

——大丈夫だよ。此処、日本だから、大丈夫だよ。

一人でタオは立ち上がることさえできなかった。…あるいは、それが発病の最初の兆候だったのかもしれない。

手を貸して立ち上がらせると、思わずにタオが叫んだ、——久しぶりだね。

理由もなく、彼女が錯乱したに違いなく思ったわたしは彼女を見詰めたままだった。

——久しぶりに、わたし、立ったね。…

タオは笑う。

——自分で、わたし、立ったね。

慥かに、そうだったかもしれない。

わたしはタオの額をなげた。

汗にまみれている、と。そう厭うて收拾のつかないタオは、蘭を俱ってバスルームに消えた。それが八時過ぎだった。

ながいながい入浴があった。あるいは、入浴の中でタオはなんとか失神したのではないかと思う。

盛んに立つタオの音がぶつかる物音と共に何度か中断したから。

三十分ばかりしてタオたちが出て来た。

タオが先に、自分で早足に歩いて。

——時間はいつ？

タオが云った。

——時間？

——ともだち、いつ来る？

——待ち合わせ？…九時…

——遅いね…

言って、そしていきなり

——遅いね！

タオは叫んだ。

——わたしたち、遅いね。今、ね。八時四十分だよ。

わたしは笑ってやるしかなかった。

タオはあなたも見た例の少女じみたワンピースを着た。

蘭に服を着せ、わたしの爲に私のいくつもの紫のシャツから、彼女が一番の紫のシャツを選んだ。

——綺夜宇さんは、むらさきが、いちばん、似合う、ね。

タオは鼻水を鼻の奥に嘔み千切る例の甘え聲に、わたしに秘密めかしてそう耳打ちした。

タオの健康は、九時を回ったあたりに部屋を出た、その瞬間には崩れた。

顔色が変わった。

青く、ひたすらに青、ルノワールの肌の翳りにも似て。

ふらつくタオをわたしは支えた。

——どうする？

——なに？

と。吐き気を抑えるのか、タオは歯を咬み嘔み云った。

——部屋にいる？

——お友達が舞ってるから、行くよ。

齧む歯のすきま隙間に、

——いそがないと、まってるから、行くよ。

ささやく。

下に降りようとエレベーターの中で一度白目を剥く一瞬を見た。。

エレベーターの密室に、5人ばかりの日本人がタオに目もくれずに立っていた。

ロビーをの儘、タオを支えながら歩く。

待って、と、自動ドアの前でタオは立ち止まった。

——いる、よ。

タオがあわてて耳打ちした。

わたしは何を云っているのか判らなかつた。

其の時にタオの目の前に蠅が一匹手を伸ばせばふれられるそこに停滞していたのが見えた。

——そうっと、ね。

タオがささやいた。

蚊を叩くように手を叩き合わせた時に、まさかにも殺されるなどとは思っていなかった蠅はタオの掌の中に姿を消す。

わたしは瞬き、須臾の遅れの後に改めて驚く。

狂気した蠅を見るような不穏をわたしは感じた。

更に遅れ、ようやくにタオが小さく叫んだ。

——いや！

と、目を剥きかけ、

——いや、手に、蠅、つぶれたよ。

わたしはタオの肩をだきロビー階の手洗いに連れて行った。

長い時間がたった。

おそらくは二十分近く。

かたわらに蘭が時にわたしを見上げ、嘲弄する笑みを隠さずに見せ付ける。

蘭はこのままタオを呪い殺してしまう気がした。

タオは吐きもしたにちがいが無かった。

部屋で施した念入りのメイクは、度重なる洗顔にすでに跡かたも無かった。

ごめん、と。

鼻から水滴をしたたらせながらタオは眼差しでのみそう云った。

タクシーで六本木の alligator まで行った。

タクシーに乗せるまでに二度、タクシーの中で四度タオは白目を剥いた。

六本木通りに添うて路上駐車したタクシーを降りて、芋洗いを下りた。

日曜日、それでも人の影は疎らにも坂に散らばった。

エレベーターに乗って、七階にまで赤い文字が昇るまでにタオは一度吐きかけた。

慥かに密室の中には人の濡れた髪の毛の匂いが残っていた。

おそらくは日本人種の。

その個室ダイニングのレセプションに君の予約した名前を言った。…加藤、と。

レセプションの男は背後の密林を模したのか、かさなり燃え上がる緑の塗装線のこっちに笑んで、——洋一郎様、千蔭様、…と伺い見た。

——千蔭のほう。

——二名様じゃ？

——増えたの。

——お部屋…

——狭い？

——若干狭くなるかと思いますが、…それでしたらお部屋、今日空きございますから、別に、

——そこでいいよ。

これ等のやり取りの間に、彼女を支える腕にタオの脂汗の温度があからさまに伝わった。タオが今や本当に発熱しているに違いなく思われた。或いは、あれからもしも裸のまま時間をすごしていたのなら、あるいは本当に風邪くらい引いていてもおかしくも無かった。

——こちらへ。

並び立つ金色に塗られたコクーン型の個室を通り抜け、君の個室迄案内された。

赤いビロードの垂れ膜を潜ると、スマホを弄る君を見た。

そこからの次第は君も知っているだろう。いずれにせよ、君が興味をいだき始めたらしい巖島の真夜羽と圓位の坊主の話を聞きなおしたのだ。

タオがまともに挨拶さえできなかったのは君も知っている、君は云った、…もう飲んできたの？

——ちょっとね。
タオはすでに顔中を上気させていた。
頭からアルコールのプールにでも使っていたかのように。
タオの掻いた汗のにおいが鼻に着いた。
君が今後について…大学を二三日休講にして巖島に渡る云々のそれ、そんな話の途中にか、タオは云った、——綺夜宇さん、風邪、引いた。と。
君も聞いた。
——熱、あるよ。と。タオは他人の検診をしたかにも、そういった。君も聞いた。
なにやにやあって君はインターホンに別に、横に成れる個室を用意させようとした。
時はすでに十二時に近かった。店のピークはすでに過ぎていた。個室の中からさえ外の閑散は見て取れた。
——酔っぱらっちゃって。
いいわけをしながら君がタオをささえて用意された個室に連れて行った。蘭と共に。
君は一人で帰ってきた。
確認すれば、此の時、君も俺もタオの体には触れていたということになる。
君はふと、行った。
——匂うね…
——なに？
——きづかない？
わたしの馴れた鼻は気付いて居なかった。
——今気付いた。此の中、いいにおいする。
——匂い？…どんな？
——どんなって…
君は言い淀んだ。君は言葉をさがした。わたしは見ていた。君は自分のこととして覚えてあるか？
君は云った。
——赤ちゃんの口元の甘い匂いに、さらに甘いみつやら砂糖やら練乳なら混ぜ込んで嫌になる迄甘く甘くしたような…
そして、つけたす。
——嫌じゃない…いい匂い。…彼女の？
君はそういった。わたしは聞いた。君がどうかは知らない。私は覚えてある。
それから何を話したのか？
巖島の、茨のなにやかやに違いない。
あれから坊主は連絡を寄越さないと謂った。
私の處もそうだった。そもそも爰何日か、わたしはあの坊主のことなど忘れていた。
君が不意に時間を気にした。あるいは、私が気にしたのだ。だから、君まで時間を気にしたのだ。違うかもしれない。いずれにせよ君が云った。
——もう一時だね。
——そう、…まさか、これから予定があると？
——ない。けど、大丈夫？

——俺？

——彼女…

君はそういった。私はそれを聞いた。

——水浴の子。

わたしたちは彼女の個室の前に言った。

君は云った。八人用の個室の中に寝てる、と。

慥かにそれは葉の繁みをもしたペインティングの壁面に垂らされた赤いビロードの向こうに、内側の光さえ遮断して暗く、紅の昏いグラデーションを曝した。

中に私は湿気を感じた。

——開ける？

君は云った。

答えずに、わたしはビロードを引き開けた。

周囲には誰の眼も無かった。

店員は巡回する必要がなかった。私たちの外にはあと何組いたのか。数えるほどの客数を、数えるほどの店員で廻していたに違いない。だからさぼっていたに違いない。誰もが自分の時間に自分だけで夢中だった。

個室の座席に横たわっていたのは蘭だった。

私には最初タオの姿は見えなかった。

君の眼にどうだったかは知らない。

同じ風景の中で、いつものようにわたしたちは別々の風景を体験していたには違いない。彼女は長テーブルの下に、そして膝間付くようにタオの向き出された腹部近くに顔を、そして唇を紅に染めていた。

照明のせいで、最初それは黒く見えた。

黒い吐瀉物をまき散らしたのだと。

シャツを引き裂かれたタオの半裸の体躯の上に。

向こうの壁にタオの足は投げ出されてた。

まるでそこでは水平に重力がかかっているように。そして壁に足をつけて今、彼女は自分を支えているかのように。

なら、タオは宙に浮いているに違いないと、笑うべき妄想が一瞬私を襲った。

タオの見開いた眼は、だから、見ればわたしたちの膝のすぐちかくにあった。

口さえも広げていた。

顔は驚愕していた。

そのままに停滞した。

タオは頸の皮膚と肉を喰いちぎられてそこに絶命していた。

湿気が鼻に匂った。

床が血に濡れていた。

コンセプト・バーの極度に暗い照明が、すべてを隠した。

——喰ってる。

君がささやいた。わしは慥かに効いた。

——お前の連れ、…喰ってるぞ。

茫然の色はなかった。タオは明らかに正気の眼で、ときにいかにも可愛い子めかして媚びの笑みの内に、私を見、そして咀嚼をやめなかった。

タオの腹、太もも、二の腕、膨らみかけの胸、見れば頬までも、人の強靭さを欠くはずの歯で無理やりはぎとって喰いちぎった傷が開いていた。

わたしの眼はようやくに事態を認識した。

——一体、…と。

君はささやく。

——なにが起こってる？

わたしは聞いた。その君の声をわたしは聞いた。

わたしは君が思うように茫然としていた譯ではなかった。

ただ、自分が「知らない」事件が目の前に起っているのに目を奪われた。

…それこそを茫然というなら、たしかにそういうことになるのか。

君はなんてことを、と、そんな言葉を独り言散てつぶやきながらにタオを引きずり出し、そしてテーブルに八人分用意されたままの放置のおしぼりを千切っては開け、開けてはタオの唇を拭った。

タオは抗わなかった。

あくまでも冷静に、彼女は恥じらいの眼差しで君に応えた。わたしは確実にそれを見ていた。

ビロードを占め、個室にタオをだけ連れ帰った。

——熱、ある、よ。

タオはささやいた。

壁に背を靠れ、急に虚ろなまなざしを曝して。

向い、わたしのとなりに座りかけた儘のその中途半端な姿勢をくずさない君は云う。

——どうする？

わたしにささやく。

タオが云う、——わたし、…ね？

と。

——綺夜宇さん、…ね。

と。

——熱、ある、よ。

いかにも息も絶え絶えに。

私は云った。

——ホテルに連れて帰ろう。

——ホテル？…いまから…もう時間が、…どこの？

——俺の。

——お前のか。…どうする？ あの、喰われた方、どうやって外に…

——放っとけ。

——ほっとく？ どうやって。

——とにかく行こう…どうせ偽名だろ…電話番号は？

——嘘の番号。

——足がつく前に…

私はタオを連れた。君の羽織った薄手のジャンパーに衣服の汚れは隠した。

レセプションで君が何か言いかけたので（…会計しようとしたんじゃない？）俺は云った、…下、タクシーいるよね？

レセプション・マンは興味ない、形だけのサービス顔に言う、——たぶん…

——六本木だったら、おそくても捉まるでしょ？

——でも、今日、日曜日ですから…お帰りですか？

——連れだけ…この子だけ先に、…僕らすぐ帰って来るけど…たぶん、外苑東まで車止めに行くから…

——そこまでいったら、たぶん、…

——ドンキーの前くらい、たぶんいるよね？

——たぶん。

——そのままにしといて。…ふたりとも出るけど、もうひとり、あれ、寝てるから

——結構ですよ。大変ですね…お手伝いしましょうか？

——できる？

——ちょっと、いま、スタッフあらかた帰らせちゃって

——じゃ、いいです。

——大丈夫ですか？

——呑ませたの、俺らだからね…

わたしは笑った。

外に出て外苑東通りでタクシーを止めるのに数分。これが、二時前か？

それから俺たちはタクシーで出た。

新宿に向かった。

中でタオは云った。

——これ、なんていう？

——日本語？

——熱、でました、からだ、さむいです、ふえるえます…

——寒気？

——さむけ…

君が聴いたかは知らない。

わたしは聞いた。

部屋に戻る。すでにタオに吐き気はなかった。眼差しはあきらかな発熱に赤らんでいた。

体中の血が温度を以てその頭にあつまりつつあり、と。そんな妄想をわたしに喚起した。

——いい部屋、とまってるな。

君が云った。

おそらくそうした、なんでもない一言がすくなくとも君にはひつようだったのだ。

タオは自分で立って、そしてささやく、…あつい、…と。

言った。

——綺夜宇さん…あつい。燃えるよ。あついで。燃えるよ。たぶん、火になるよ。

君も聞いた。

そして君も見た。
君も眼も気にせず、…正確にはその意識さえすでに無く、暴れ掻きなぐるようにタオは自分の衣服を剥ぐ。
素肌を曝した。
頭部の赤らみが嘘のように、肌は只管白いままだった。
ふらつきながらタオは自分でシャワールームに掛け込んだ。
閉めもしないドアの向こうに溢れる水流の千切れ飛ぶ飛沫の騒音が手元にまで響いた。
君は云った。
—なにやってるの？ あいつ。
—あいつ？
—あの女…なんて、…そういう犯罪者なの？
—安心しろよ。たぶん初犯だよ…ちがってたりして。
—お前、知らないの？
—知らないね、…知ってたら、
—おい。
—なに？
君は云った。—やっぱり、するな…。
—なにが？
—いい匂い。…乳児の唇の周りの匂いの、その思いっきり過剰な匂い…
—匂い…
たしかにそうだった。わたしもすでにそれを鼻に嗅ぎ続けていたことを思い出していた。
慥かに、…と、思う、わたしは、タクシーの中でも運転手が云ったことをこのときにはじめて思い出した。
—いい匂いされてますね？
寡黙な彼がそれだけ唐突に言ったのだった。
振り向きもせずに、
—なんですか？ これ。そちらの香水なのかな？
外国人だと気付いた茫然のタオに、運転手は遠慮なくそう云った。
—匂うね。
わたしが独り言ちるようにそう言って、君が更に何か言いかけた時に、雪崩れるようにタオは濡れた全裸の儘飛び出して來、そのまま私たちの数メートル先に不用意に立ち止まった。
ないし、四肢の動きを停滞させた。
—綺夜宇さ、…綺夜、…きや、
と。
あるいはそれは最後の悲鳴のように聞こえた。
—わたし、ね。病氣。たぶん、綺夜さ、綺、きや、…
と。
言い終わらないうちに彼女はそのまま驚愕と媚びを同居させたゆがんだ表情…あるいは笑うことに失敗したようなそれを固まらせたまま、胸のちかくに広げて擡げた腕の、そ

の指先から肘にまでいたる皮膚を…筋肉を…骨格を？ 液体のように伸ばした。
右は水平に。左は垂直に。
私は見ていた。君は見ていた。
それを。
のびた液状の肉体はかべと天井に触れ、一度さらにはげしく乳児のいとおいしい芳香を掻き立てて、そして壁に吸い込まれた。
ないし、壁をも吸い込んだ。
即ち、同化した？
純粋な質量を増加させた壁面は息ものの息遣いじみてやさしくふくらみ、さざめく。
停滞したタオの身体は頭先从り足元から、乳房から膝の先からなにかからあらゆる隆起の先から雪崩れて崩壊し、最初にふれるものに匂い立ちながらどうかした。
——なにを見てる？
君が云った声を聴いた。
すでにタオは縦横無数の液体の線分の戯れに他ならなかった。
——何が、…
と、君が
——何を起こしてる？
言い終わる寸前に、タオは消滅した。霧が晴れたに似てそれら液状の線分が消失した時に、或は残ったこまかなになかが始めたのか、虚空に雫が玉散った。
それは慥かにわれわれにも触れたのだ。
温度さえあった。
かつ、雫の痕跡さえも無く。
君はつぶやく。
——こんなの、俺は知らないぞ。
時に、おそらくは恣意的に逆算するに三時前程度だったか。
ややあって君は言った。
——死んだってこと？ 消滅したってこと？
——違うと思う。
——なにが。
——いきてるよ。たぶん。
——あの子？
——壁が、いきてるじゃん。
私は云った。
わたしの眼差しの中に、壁も天井も彼女を吸いこんだものは、ないし、吸い込まれたものは、質量の増加を隠しけれずにさざなむままだった。
わたしはそれを見ていた。
だから、云った。
——たぶん…すくなくとも細胞レベルで？ それらは、同化して生きてるってこと？
問うように。
君はなににも云わなかった。

——極度に純粋な万能細胞？ 厥れ自身で生命を維持し、喰った物に擬態する？ その分子構造さえ？…判らないな…けど、生きてる。…喰ってるんだよ。すくなくとも、壁に擬態はしてる。擬態するってことは、ばらばらになっても生きてるってことだろう？ でもなんで、いきなり、夕オに？…夕オが？…なんで？

わたしはベッドに座った。君は立ったその現象を見ていた。身動きする気にはなれなかった。

わたしたちは何の考えがまとまるでもなく時間を過ごした。

背後に朝日が昇るのが分かった。

うしなわれていく室内のくらしのせいで。

壁はいつの間にかその質量過剰を解消したかに見えた。乃至、通り過ぎてどこかに行ってしまったに違いなかった。そうわたしは思った。すでにあの芳香はなかったから。

君は云った。

——どうする？ お前。…これから、でも、ここ、あぶくないか？

——ここ？

——あぶないぜ、きっと。

——出よう…

——何日おさえてるの、ここ。

——一週間。

——じゃ、

——そのまま出ればいいよ。放っとけ。

立ち上がって、わたしは私の手鞆一つの荷物だけ持った。

——荷物処分しないと。

君が云った。

——あの子たち？

——パスポート…

——彼女たちの？

——バレるだろ。

——関係ない…寫し、とってたよ。

——お前のは？

——駄目だね。奴ら、取り忘れてたね。でも、一緒に日本に来たからね。公的機関がその気になればおれの身柄は知れる…

——じゃ、

——放っとけ。

わたしたちは部屋を出た。時に、六時。

とりあえずは私たちは渋谷に言った。カフェで渋谷のホテルに連絡した。君は自宅に戻った…

香香美清雅

文書 13

文書 13

文書 13

○

久村優人から圓位あて

(2019.09.17. メール)

ご無沙汰しております。

急ですが、19日の木曜日にはそちらに香香美清雅氏同伴でお伺いする予定です。

挨拶もなにもなく、ただ気にかかる儘にお伺いしますが、そちらはいかがでしょう？

19日の午前中、住職には連絡できると思います。

久村優人

○

圓位から久村優人あて

(2019.09.17. メール)

こちらこそご無沙汰を。

ということは、明日あたり香香美氏は日本に帰られるということなののでしょうか？

前倒しになった計画、愚僧にとってはうれしいばかり。

さて、其の後のこちらの一連の動きでございますが、項目ごとに纏めたほうがよろしかろうと記。

・眉村家（和哉、一重、眞夜羽）

彼等はそれから小康状態を保っているようです。

眞夜羽の早朝の放浪は相変わらず二三日つづいたようですが、このところは何事も無し。

噂に聞いただけですが、なんでも和哉氏、寝る時に眞夜羽の体を縛り付けているとか。

或は、母上のある時には不可能な男親の措置ということか。

これは噂とはいえ不本意らしい一重さんが知り合いに相談して廻った、その先々のお婆様お爺様連中の、愚僧にかわるがわるにひとこと入れたという情報先の爲に、おそらくは間違いのない事実なのでしょう。

・眉村家（深雪）

こちら、そのまま祇樹古藤記念園に安樂を食っておいで。

それはそれでよろしいかと愚僧心をやや落ち着かせる此の頃。

あれから一度面会に行きました。變るところなく、すこし太られたようにも見え。

しだいしだいに癒されるのではないかと。

・佐伯騰毗

むしろ懸念はこちらのほうで。

神社には若い神官もいれば業務に差しさわりはなくとも、それでもあの若い当主の失踪、
憚って騒ぎ立てないながらもすでに島をひっくり返しての大騒ぎ。

又かのお婆様の容態も悪化の一途をたどるようで、このところ毎日祇樹古藤園から訪問
介護のほうしてさしあげているようです。それとともに奥様の方の心のケアも。

とはいえ未だ気丈でいられる。

思うに騰毗の不在に悩まされながら、しかも心にはその死をさえ覚悟済みらしくも、故
にその弔い終わるまで心丈夫にいる積りところと思われ。

ただただいたわしく。

ご到着の連絡、ひたすらに心待ちに。

沙門圓位

○

久村優人から安素野飛景あて（2019.09.18. メール）

（本文）

お疲れ様。

今も香香美は僕の許にいる。

そちらのほうで取り立てて捜索する必要はない。

傳えて欲しい。あのひとにも案ずるな、と。もっとも、香香美が目の前で例えば腹を
切ったとしてもあの人は眉一つ動かしはしないだろう…決して、冷酷なのではなくてね。

ある事件があって、そちらはうまく何とかなったようだけれども、…まだわからない
けれど。あなたがたの手を勞す必要もない。もう勞したからなんとか何ているのかもし
れない。そこら邊の詮索は敢えてしないでおく。

ともかく、あの事件のあと、その影響なのかなにか軽い錯亂に、…小狂状態とでもい
うべきか、そんな感じには陥った。今朝見た限りでは落ち着きを取り戻したようだ。結
局はガラスの心の持ち主とも言える。驚くほど冷酷でありながら、ね。

念の爲、レポートしておく。

あるいは、個人的な記録の爲でもある。

確認あれ。

久村

（ファイル）

17日。早朝澁谷のカフェで別れた。時間にして8時くらいか。宿泊先の部屋はインター
ネットで私が抑えた。チェックインまで時間がある。その間は彼が好きにするだろう。そ

う思った。

以外に、何の発作の兆候もなく冷淡な程に落ち着いていた爲。

カフェは澁谷でよく使う例の道玄坂の映画館の上のあそこ。

私の事務所は青山にあるから近い。ホテルは櫻ヶ丘。

時間がなく、また、個人的に汗やら何やらを洗い流したかったので、コーヒー一杯ですぐに出た。

故、此の日の彼の足跡は知らない。

氣になって時に Line を鳴らしたが不在。

青山学院大のキャンパスの中で悶々とした。

夕方 Line を。ふたたび不在。メッセージはいままでのもので未読の儘。

案じられ、その足でホテルに向かった。

部屋番號は知っていたからフロント通さず9階に。ドアをノックしても内からは聲が聞こえない。不在なら、ひょっとしたら君たちに逢っているのかもしれない。すくなくともわたしは誰からもそんな話は聞いていない。…どうなんだろう？

不安を感じ始めた時に、ドアがいきなり空いた。

中から女が出て来た。

そして挨拶もなく立ち去った。目も合わさない。着亂れた風もない。おそらくあれが例の、最後まで香香美に付き添っていた精神科醫の女だったかも知れない。

質素なスーツを着ていた。綺麗とも何とも、まともに顔さえ見せなかった。

ややあってドアがもう一度空いた。

今度は香香美。

彼が云った、入れと。

いかにも不遜な言葉やりと相反していやにやさしい聲だった。此の時に彼が已にすこしの発作の中にあることに氣附いた。

彼はいつもどおりに美しかった。それ以外にはないもない。眼差しは澄んで、それが狂氣の人のものとは思えない。狂うほどに沍える、そんないつもの発作の香香美。

わたしはかすかに憐れんだ。

香香美の歸國の目的は遠く安藝の宮島にあった。そこにある生まれ變わりを自稱する少女がいる。彼女に逢いに行くのだ。是は臆て君に連絡しよう。その詳細を。

香香美に送った文書もある。それを読んで彼はめずらしく興味を持った。

根掘り葉掘り聞いていたが。

部屋に入った。

香香美にも着亂れた様子はない。香香美のいつもの躰臭が、…甘い、蜜と百合の匂い、あれが部屋中に籠って女の匂いなど掻き消していた。

香香美はベッドに身を投げ出して、呆れたようにわたしに言った。

——どうした？

不遜に、そして限りもなく優しく。

——お前こそ。…元氣？

——何千回死んだと思う？…此の上さらにご健康を、か？

——報告しとく。例の…

—なに？
—宮島の…
—痴呆の佛弟子の？（と、云ったとわたしは解した。地方の、かも知れない。わたしには判らない。…その生まれ變わりの件にかかわってるたしか眞言宗の坊主がいるのだ。あそこらへん、たしか弘法大師のおひぎ元だろう？）
—ひとまず、何事も無いらしい。安心してくれと、
—坊主が？
—云ってた。
—それで？
わたしは言葉に詰まった。だから謂った。—興味ない？
—知ってるんだ。
彼は言った。小聲で。嘆くように。
—もう知ってる。いつ行く？ さっさと、彼等に教えよう、彼等が何を喰っているのか…
—喰う？
—喰いちらす犬の糞の原子分解を。
わたしは笑った。そして云った。
—いつ行こうか？…大學はもう、明日から一週間休講にしといた。…目くじら立てられけどな。
—なんで？
—だって、いきなり、大學を
—なんで、お前が職務放棄する必要がある？
—ひとりで行くの？
—お前が來たないならくれればいい。
—ならそうする、
—妹がうるさいんだ。
—妹？ だれの？
—お前の？ まさか。そんなもの存在しもしないだろう？
—お前も、
—俺の妹が
と香香美は云う。しかし私は知っていた。彼は一人っ子だった。故、なんらかの妄想的な意味があるのだろう。思うに、自分自身の分身として幻造った妹、ということか。香香美曰く
—俺の妹が俺の亡骸を啜えてへばりつく。
—壁に？
—天井にも…ながく、ながく、ながく、引き伸ばされて。
—溶けたチーズみたたく？
—アンダルシアの犬はダリの映画じゃない。あれは論理化された絵画構築とは無縁の直接的な欲望を見てやるべきだ。且つ幼兒的で所詮は糞おもしろくもない…模造品の手のひらと目のにじませた液躰の、それらのやわらかさを捉えようとした欲望。誠實なんだよ。…事実、觸感をまなざしに感じさせるほどに柔らかだろう？

—好きなの？ あれ？
—太り過ぎた女の健康美に興味はない。
—妹は何してる？ お前に喰いついて？
—咀嚼する歯さえない。歯はむしろ鳥の羽根めかせてその奇形の全躬にばらまいて口を開く。一本ずつの歯の爲に引き裂かれた無数の、
—お前を喰ってる？
—まさか。こうささやく。事実を俺に、
—事実？
—ささやく。彼女は。あの日あなたはお母さんを殺さなかった、と。
—あの日？
—十二歳の…話したろう？
—六本木の…
—あの部屋で、名前も付けられなかった妹は未だに覚醒し俺の眼差しを喰って共有しながらすべてを見ていた。おれが彼女の奇形の死人（志毗登）の眼にことごとくを見ると同じく、…耶舎王、…お前は知る、…だろう？ すでに妹に喰われたものをお前は今喰おうとする。
—お前を？
—瞿曇の悉達多の皇子はすでに喰われた。彼が見い出しもしなかった遠い阿憂樹に涙した日に。ほかならぬその阿憂樹の葉の雫の宿した王その人に。とまれ、妹はささやいた、あの日多伽子は阿憂の皇子を殺したと。
—お前を？
—その夜更け、女はいつものように注射を打った。…もうすでに彼女はそれなしでは生きて行けなかった。とまれ錯亂は何もなかった。それを薬のせいにしては彼女の自尊心を傷つけるだろう…事実、何の曇りもなく冴えた意識に彼女は阿憂ノ皇子をはかなんだ。それが事実だ。彼は自分あんきあともこの絶望的なまでに冷酷なる世界の中に生き続けなければならない、たったひとりで、その全き現実の容赦ない無惨が彼女にト殺を決断させた、そこに憎しみはない。むしろ自己犠牲の愛こそあった。
…見える？ 愛しくない無慈悲なまでに冴えた風景が？
阿憂ノ皇子は自分の頸を絞める母を眠気の醒めない起き抜けの眼に見出していた。窒息の苦痛とともに。熱狂し混濁する意識と、母を凝視する澄んだ意識が共存した。妹は云った、…あなたも知っていたでしょう？ と。多伽子の心を。目を剥いてこえもなく、ただ阿のかたちに広げた唾液の糸する叫びの無い聲に自分ひとりの耳の内にだけその叫び聲をききながら、多伽子の繊細な心のすさまじい心の震えの連鎖を。
彼女は見ていた。愛の風景、そして俱なって苦痛しかない破壊されゆく固有の肉躰の痛みを。
息子の肉體のこと切れた時に多伽子は自分の子殺しを知った。故、彼女は明けの前の道を走った。ぐるぐると、そのマンションの周囲を。
倒れた多伽子を牧師は見つけた。朝に。迦祁の聲さえない朝に。鵯の羽搏きだにも無く。教會の庭の真ん中に彼女は倒れていたから。…故、彼女は未だに病院に収容されている。わたしのあの人が、彼女をてあつく介護している…俺はすでに死んでいた。…阿憂ノ皇

子は…知ってた？

——何を？

——幻を見るな…もうそれ以上。…現実に触れろ。…耶舎王。とっくに死に絶えた亡霊よ。

わたしはすこし彼に付き合っ、此の日は帰った。

○

久村優人から安素野飛景あて（2019.09.18. メール）

（本文）

先の続き。

久村

（ファイル）

18日。

朝、香香美を尋ねた。

此の日はノックの後時おらずに香香美が出る。

彼は云った。

——昨日、来てくれたね？

此の時の香香美はひたすらに優しく紳士的だった。

——ありがとう。…もう落ち着いた。あんなことがあったから…

その前々日に香香美が連れて来たベトナム人ふたりは失踪したのだった。日本語を故國で勉強していた。未成年故に労働ビザなど落ちるわけがない。彼等は香香美を担いだのだ。彼から聞いた話を総合するに、その少年二人は狂氣の發作に消耗した彼の鋭敏な心をさかなでたのだった。恐らくは、香香美の妄想言そのままに、わたしは日本人の生まれ代わりです、日本に歸りたいです、と。これが上に言った「事件」の詳細である。

だから部屋に入ると香香美は云った。——覚えてる？

——なに？

——お前に教えた…

——あの、ベトナム人？

——彼が云った、あれ…海の中で燃え上がる城…

と、そのベトナム人少年のひとは云ったのだった。日本には海の中に燃える城がありますね？ そこに僕を無くした僕のお母さんが、泣きながら僕を思っています、とかなんとか。

——竜宮城なの？ ベトナムにもそういうのあるの？ お前、教えた？

わたしは笑った。香香美は云った。

——あれ、妄想だと思う？

——その子たちのでっち上げだろ？ お前、逃げられた、…

——妄想じゃない。日本にはあるよ。海の中に燃える城。

—どこに？
—嚴島神社…
—宮島？
—あれ、海にあるだろう？ 突き出して。岸から見れば満潮には海の中にある。神社の柱は、とくにあそこ、うぎったいくらいの朱の濫立だろう？ 表現すれば燃える朱の柱、と。燃え上がる海の中の城。
—それは…
—こじつけじゃない。…そう思ったから、じつは、その轉生の餓鬼の話に乗って茲にきた。
—でも、もうベトナム人たちは
—逃げたね…放っとけ。不法滞在外國人何ていくらでもいる。
ややあって、嚴島行きの日取りを確認した。
いつでもいいよ、と香香美。
故、明日にしよう。私が云う。—お前も荷造りあるだろう？
—ない。
—実は、俺があるんだ。
言って、わたしは笑った。
夕方、ふたたび櫻ヶ丘に行った。
ノックの後も香香美はなかなか出てこなかった。數度叩いたのちにドアが開いた。
香香美がドアの向こうに微笑む。
—どうしたの？
そうささやいた。
—何かあった？
その優しい物腰に彼に再び狂氣の時が訪れているのを察した。
—入っていい？
わたしは云った。
—好きにしな。
言って、彼は笑った。
わたしが部屋の中に入ると、彼の持ち込んだ手荷物はばらまかれて、そこら中に衣服が散亂していた。
—どうしたの？
—俺じゃない。
—誰？
—妹を殺した肉食獣が食い荒らして行った。
—獣？
—見たよ。そこから（…と、香香美はエアコンの通風口を刺した）入ってきて、それで…
—誰を喰い散らしたの？
—お前を。
—俺？

——氣付かないだろ？すでに生きてさえいなかったことに…
——まさか。
——俺も驚いた。君が歩いてくるとは思ってなかった。…まさか。
——生きてるぜ。
——かもな。それが事実なんだろう…いいよ。それで。そのままにしとけ。
彼は笑んだ。
わたしは構わずに云った。
——あした、行こう。八時に迎えに来る。
——遅いな…
——早い方がいいか？
——七時は？
——お前がそれならそれでいいぜ。
香香美を見捨てるでもなく、わたしはその日は歸ろうとした。
返り際、香香美は云った。——みろよ。
——何？
——紅蓮の破滅の色を曝す…空さえ。
——なにを…
——夕暮の、焼けた空…
香香美は空など見て居なかった。彼は私を見ていた。そしてかの部屋の窓からはどうやっても東のただくらい空しか見えない。そもそもカーテンは閉じられたままだった。
わたしは彼の部屋を出た。

○

久村優人から安素野飛景あて（2019.09.18. メール）

（本文）

先の續き。

久村

（ファイル）

19日。

6時半に彼の部屋に行く。キャリーバックの騒音を足元に鳴らしながらである。

ノックすると香香美は平穩そのもの。

ドアを開け、——とりあえず入れよ。

そう云った。

部屋の中はまるで何もなかったように（あるいは誰かが…例えば例の精神カウンセラー女史か？）綺麗に整理されていた。

香香美は言った。

——取り敢えず部屋は引き拂うよ。今日で。

——でも、たぶんあっちには一週間も居ないぜ。
——いや、もっと早い。
——もっと？
——たぶんね。もう知ってるんだよ。
——何を？
——お前は一週間くらい？
——大學の関係で…お前は、興味あればもっといればいい。
——そうだね。…それから追加の報告は？
——坊主はなにも云ってこない。…佐伯も…當主は失踪中なんだろうし、あそこの奥方とは電話番号も何も交換してない…
——いいんじゃない？ それで。
よって、部屋を出た。
香香美の荷物は手荷物ひとつだけ。
それから品川驛に行く。駅のカフェの中。香香美は今日の前でスマホで音楽を聴いている。イヤホンでね。彼には言った。大學の方に上げるべきレポートがあると。本人の目の前で偽って君に文書を送っている事になる。尤も、香香美のことだから、実は気附いて放置しているのだろう。そんな氣もする。
宮島についたら、それはそれとして報告することにしよう。
連絡待て。
以上
久村

○

香香美清雅から片岡比羽犁あて、2019.09.18. メール

(本文)

先に話した件について。
いくつか考えたことを。
あなたの神経を刺戟したのではないかと心配。実際、あなたの眉間はあなたの動搖を隠せていなかった。…血なまぐさいのには、いくらなんでも馴れるということはないから…
大丈夫？
でも、僕らは冷静になって考えておこう。…
香香美

(ファイル)

以下思いつくままに

・タオは日本に着いたときから極度の緊張状態にあった。繰り返される嘔吐、失禁その他(詳細は送った通り及び話した通り)。

原因は何か？ 日本での暴行事件の爲。

・タオと蘭の姉妹関係について。

蘭を私に紹介した日の翌日の談話を今、記憶する限り記す。

8月14日

この日蘭を迎えに来たタオをわたしは部屋に迎え入れた。

しばしの雑談。

その流れの中に、わたしは單なる笑い話として言った。——タオさん、何歳だっけ？

——28、だよ。(彼女のそれ、鼻水を鼻の奥に咬むような甘え聲で)

——此の子(…蘭)、十…

——四。

——十四歳違いか…お母さん、すごいね。

——すごい？

——タオさんは何歳の時の子供？

——わたしは子供いないよ。

——お母さん、何歳だった？ タオさんを生んだ時、何歳だった？

——今、56歳…

——28歳？

暗算して、四十二。かなりの高齢出産には違いない。

——でも、すごいね。四十二歳は、

——お母さん、死んだから、ね。

——亡くなったの？

——わたしが十歳のとき。

——十歳？

——お母さん、違うよ。タオは。

——新しいお母さん？

——八年前に死んだ。

——新しいお母さんも？

——わたしのじゃ、ないよ。わたしたち(おそらく彼女と弟)のお母さんじゃない。タオの。

——お母さん？

——結婚しなかったから。だから、新しいお母さんじゃない。

——蘭のお母さん、亡くなったの？

——亡くなった。だから、…

——なんで？

——交通事故。蘭は、

——それで？

——だから、言葉、はなせない…

——どうして？

——交通事故、蘭といっしょに、交通事故したから、

——一緒に？

— バイク。
— 轢かれたの？ 蘭も？
— 蘭は死ななかつたから、だから、蘭はひかれないけど、蘭のお母さんは、…
— 轢かれた？
— バイクに。…血がいっぱい、
— 誰に聞いたの？
— 見てたの、わたし、
— タオも？
— 目の前。喫茶店で、砂糖黍のジュースを、
— ヌックミア？
— Nc mía
— その時に？
— バイクが入って来た（露店の店に突っ込んで来た、と）。
— それは…
— 蘭も匆ねた…跳ねる？
— 飛んだ？
— 向こうに。飛んだ？…たくさん距離、飛んだ。蘭のお母さんは、
— 亡くなった？
— 亡くならない。頭から血がたくさん、…出て。でも、亡くなってないから、
— 病院？
— 蘭は、生きてる。心も大丈夫。
— 意識が。…泣いたでしょ。
— 泣かない。強い子だから。泣かないけど、心が、…壊れる？ 壊れないけど、
— 悲しいね。
— 悲しくないけど、痛い？…けど、強いから
— 大丈夫？
— 大丈夫じゃないよ。でも、ちゃんと見てた。
— お母さんを？
— 蘭のお母さん、大きな声…叫ぶ？…叫んで？
— 痛たって？
— 違う。こと葉じゃない。…聲、
— 獣みたいな？
— なに？
— 動物みたいな？
— 猫みたいな。變な、こわい猫みたいな、
— 病院で亡くなったの？
— 二か月あと。…おかあさん、顔のはんぶん、ないから、顎がないから、話せないし、
食べられないし、
— 意識は？
— 心？

——心、あった？

——あるけど、なにもわからないよ。口開けるけど、なにも聲しない。目を開けて、でも、

——わかるよ。

——だから、…

——蘭は、…

——そう。

ややあってわたしは蘭の頭をなげた。

蘭はなにも反応を示さなかった。

触覚の感じ取る儘にわたしを見上げた。

顎をつきだして。

蘭を見ながらわたしはタオに言った。

——タオさんは、蘭が好き？

——好きじゃないよ。…ほかのお母さんの子供だから、ね。

——嫌い？

——嫌いじゃない。けど、可哀想だから、

——タオが面倒見る？

——誰も居なかったら、亡くなるよ。

——そうだね。

わたしはそう云った。

蘭はタオに対して逆らう素振りは見せない。又、反抗するそぶりも無い。それ以前に、意思ある反応を基本的に示さない。時に食べ物の好き嫌いを表現する程度。

タオは蘭に対して目に立つ虐待をしめすでもない。むしろ、時に苛立つことはあれども普通の介護者だったにすぎない。

・タオの肉体が液状化した時に（液体、このかたちなきかたち…）わたしは彼女の意識がすでに存在しないと感じた。同時に、彼女が死んだとは思わなかった。液化した彼女の細胞（？）の群れは明らかに生きていたから。尤も目視の印象にすぎない…

水というかたちなきかたちが H₂O というかたちの集合にすぎないように、あれも細胞というかたちが躯体を形成するのをやめただけなのだとも思える。…

・思うに、極度のストレスが彼女の肉体に致命的な変態を齎したのだろうか？ 今のところはそうとしか思えない。精神、この制御不能なもの。結局のところ我々は、…この私もふくめて、精神を制御し得たものなどいないのかもしれない。例えば修行を積んだ禅僧は結局のところ精神反応を無みするのであって、それを以て制御というべきか。精進とは消尽にすぎない。

怪物化した精神が肉体をも崩壊させたのか？

そんなことが可能なのだろうか？

或は、可能なのだろう。精神という本来脳の諸作用に過ぎないものがその実態としてはむしろ実体として存在するかのように機能する。…これ自体すさまじい怪物的状況と謂える…我々は精神を過小評価しすぎたのだ。

・外部からの影響の可能性。

タオは云った。病気だと。人の手で叩き潰される蠅の件、…蠅は病んでいたのか？ 例え

ば未知のウイルスの保菌者として。そのウイルスがタオを崩壊させたのか？

あるいは逆に、健全な蠅が病的に研ぎ澄まされたタオによっていともたやすく叩き潰されたということなのか。どちらとも思える。ただし、蠅は事実としてタオの掌に潰されたのだ。

・ウイルスであった場合。又はタオの細胞が例えばがん細胞のように増殖するものだったとした場合。それが他人の体内でも生息可能であるのなら、その飛沫をあびた私と久村もすでに感染している筈である。

いずれにせよ経過を見るしかない。

付記、わたしは今かならずしも恐怖を感じているわけではない。事実としてはわたしは今まで恐らくは誰も見たことも無いものを見た、ただそれだけである。興奮も無い…なぜだろう？

わたしは自分の心がむしろ冴えるのを感じる。…これはわたしの心の問題だろうか？

あなたが案じるように、すでに狂気の方に堕ちていることが日常であるところのわたしの？

以下、個人的な記憶。

あの日、久村のところへ連れて行く前の昼下がりに、わたしたちは戯れた。

ホテルの寝台で。

蘭はタオの体を、自分自身がタオのものでさえないただ豊かな肉体に甘えるように、…そんな風に姉の肉体をもてあそんだ。代理母？ 否、純粹にやわらかな肉、やさしくふわふわのあたたかな肉、それ以上のものだったとは思えない。たぶん、もはや姉のもでも母のものでもなかったのだ。

わたしは狂っているのだろうか？

時に咬みつくようなそぶりをみせた。タオは。

本当に齧み切りはしない。タオは。

すべてが自慰がかかった、妄想と模造品の模倣に過ぎない戯れに他ならなかった。

蘭は狂っていた。

タオの眼にはすでに恍惚の色が隠せなかった。日本に着いたときから、無意味に嘔吐し、無意味に失禁し、嘔吐と謂う乃至放尿という機能をでたらめに果たすいわば無謀な各種分泌物生産機械は。

不意に不用意な汗にまみれ、ときの無意味に大口を明けた。目を剥き。いきなりその須臾堪えられない事象が発生したかにも。そのくせ叫び声をたてるでもなく。

タオの汗がにおった。

髪も。

おびただしく、彼女の肉軀の周辺にだけ籠った。

時にタオはわたしを見た。

見、そして、見られるわたしは彼女の眼に、自分が見出されている自信が終に持てなかった。

タオは狂っていた。

あなたが知るように、私も狂っていた。

それは事実だろうか？

十九歳の時、ホストの私がたぶらかした（悪意とともに。確実に悪意、さいしょから毀してやろうとあきらかな悪意、…あの歌舞伎町の No 1 ホステス。…の、無数の中の、ひとり）女が——伽那美（その名にあなたが私にとっての個人的なシグナルを感じ取ったに違いない事は知っている。たしかにそうだった。それは記号で、暗号で、黙示で、寧ろ鮮明な Go サインだった…わたしは知っていた。いったい、そんなことが伽那美に何の関係があったろう？ 所詮源氏名にすぎない。香坂伽那美という名の女などだれにとっても他人に過ぎなかった。関わり様のない、単に架空の他人に過ぎなかった。香坂伽那美？ 誰？…化け物だったに違いない。無力で、だれともかかわれない不在の、…いったい、田中春奈にとって私など存在したのだろうか？ 春奈にとっても不在にすぎなかった伽那美と同じように？）

香坂伽那美はわたしの思ったとおりにわたしに戀し（思いもせぬうちに、かすめとるように戀い）わたしの思ったとおりにわたしに狂い（思いもせぬうちに、かすめとるように狂い）わたしの思ったとおりに自分の感情を貪り（思いもせぬうちに、かすめとるように自分の感情を貪り——決して。決してわたしの眼にふれない、私にとっての月の裏側、クレーターの集積の光る荒れ野に）壊れた（——毀した。わたしは、）帰った部屋の中に血まみれの伽那美を見たときに——あれは生きていた。死んでいたと？…まさか。

伽那美はベッドで手首を切っていた。

それから首も切っていた。

更に右目だけをカミソリに切っていた。その眼球を（——なぜ？）

死んでいたと？

まさか。

わたしは伽那美を殺した。その左手の指の先に転がしたカミソリに、（——なぜ？）わたしは（なぜ、そこに？）伽那美を切った。その皮膚を。（だれもがわたしに言った。あなたも。あるいはあなたこそは。わたしは慥かに殺した。二度三度、むしろその恒河沙乗も）通報したのは自分を救う爲だった（わたしは公権力に自分を売り渡したのでも公的機関もて自分を裁いたのでも無かった——事実、すでにわたしは私を殺していた。伽那美を？ 架空の伽那美もて？ だれが自死などしただろうか？ それは常に自殺であって、自殺は常に他人を殺すことなのだ。たとえそれが自分の肉躰であっても）

警察は云った、——一体何があったの？

と。

血まみれのわたしを見て？ 伽那美を見て？——一体、そこに誰が存在してゐた謂うのだろうか？

あなたは云った。

言葉さえなくした私に。

あなたは云った。

叫び声さえなくしたわたしに。

私は口を開いた。

何の爲に？

聲さえなくに？

喰う爲にか？

なにを？

吸う爲にか？

なにを？

わたしはむしろ形のない組成物にすぎなかった。

わたしの知らないところでわたしは生きていた。

故、あなたは私を作り上げた。

もういちど。

故、あなたがたとえ私を恋人として愛したときであっても、わたしは単に一個のあなたの創造物だったに過ぎない。

母はあなただった。

それは事実だった。

今、僕は狂ってなどいない。わたしは今冷静な、醒めた事実だけを語る…) だれが狂っていた。…そのホテルの部屋の中に。蘭は狂人だった。タオは狂人だった。私こそは狂人だった。

我々は皆狂人なのだ。なにもかも。鳥も。鳥の皮膚の下に寄生した線虫も。羽根に付着したナノ・ウイルスも…或は捕獲され拘束された鳥籠のプラスチック、その化学式、乃至網なす鐵さえも。

鐵はあきらかに狂気だった。

むきだしの…無垢なる…故にそれこそはイノチそのものだった。鐵は…

イノチが我々狂人どもの錯乱する例のイノチらしくある必然など無い。鐵こそ命だったのだと語ってやれ、むしろアインシュタインに。わたしは経済学者や法学者にはもはや語らない。まして哲学者になど。アインシュタインとシュレーディンガーに語ろう、鐵、それは命だったと。君等の理論を一度再考せよと。

なぜだろう？

わたしは今、ただ素直に悲しい。

香香美

○

久村優人から安素野飛景あて (2019.09.20. メール)

(本文)

香香美との嚴島 (及び岡山茨市) に於ける一日。

ご確認あれ。

久村

(ファイル)

8時15分發ののぞみに乗る。新幹線の中で香香美は無口だった。寧ろスマホで音楽を。見たらヴィヴァルディだった。最近の趣味ということか。

東京を出る時は曇り。次第に晴れ間が多くなり、姫路を過ぎるころには完全な晴天

だった。

広島駅で乗り換え、又逆行する形で山陽本線で廿日市駅に。そこでフェリーに乗る。海と謂っても内海なので、すぐそこに宮島は見える。大鳥居も（尤も、現在修繕中である）。

ここまでで午後1時すぎ。

廿日市の波止場で圓位法師には連絡した。

ものの數分で宮島に着く。

さすがに圓位法師もまだついて居ないだろうと思ったら改札の向こうに法衣の人が立っている。風呂敷を下げた圓位法師そのひとである。聞くに下で檀家の方と食事をしたのだと。

埠の仕掛け時計でちょうど蘭陵王の舞人の人形が出ていて見得を切った（…というのかなんというのか。そんな風に見えた）。鳴る音楽はもちろん蘭陵王本曲である（嘉鳥が時に笛でふくあれ）。

圓位と再會の挨拶。

後、圓位、私の背後なる香香美を見て詞をかけようとするに香香美（この日彼の精神状態は良好だった）「お久しぶりです

そう云って笑う（初対面である）。圓位須臾詞なく私香香美の發作を疑う。

振り返るに香香美屈託なく笑んでをり曰く「そういった方がいいでしょう…いろいろ話したから…聲で話はしなかったけど…けれども…でしょう？ すでによく知ってる人に逢ったみたい。…違います？

圓位は笑った。云った。「お疲れでしょう。いつ日本に？

「ついこの間…東京の方にも合うべき人が二三いて…

「それはそうでしょうね…どう？ 宮島は？…瀬戸内。はじめて？

「限りなくはじめてに近いですね…空が…

「空？

「やっぱり、此の國の空は霞んでる。纔かにね…光の成分が違うような…ここら全体が島だから、ということなのかな？ 台湾にも中國にもない…もっと、かすんである…

「何か、食べられた？

「お昼？

私「まだなんですよ。ずっと移動で。

圓「おいしい駅弁もあったのに…牡蠣とか寿司とかね、…じゃ、とりあえず、お昼を。

と、圓位の紹介で海鮮料理屋へ。焼き牡蠣に薄味のタレをかけた丼物。これはこれで旨い。

圓位はすでに済ましたと。又、精進メニュー菜食メニューも無ければ食べるものも無いということか。

食べながら報告をと思ったが圓位、ぜひお腹いっぱいにしてから、と。

命を戴くときには命に感謝しそれ以外に浮氣はしないこと、と。笑み乍らこれはお手馴れの法話のひとつか。

食後同じテーブルで圓位の報告を聞く。とは言え特に變わりなし。

佐伯の当主騰毗は家出中、眉村家は夫婦別居、そのまま。

圓位、風呂敷を解いて笛袋を出した。わたしに云った。

圓「佐伯のお母さんが、こちら、差し上げてくれと…

私「これは…

圓「尺八。あなたが前來られた時氣に入っておられたから、と。…騰吽もあんなことになったからせめても形見に、とね…

私「縁起でもない…

圓「そのとおり…いいのよ。困ったちゃんの歸って來たら、お祝いに返してやりやいいのよ…

仍てあくまで假りにお預かりしておく。

圓「とりあえず、どうですか、初めてということで、神社にでもお参りに？

香「いや、…片付けてからにしましょうよ…ゆっくり、

圓「片付く？

香「眞夜羽の方…

と言って、そして改めるように圓位を見て云った。

香「お寺の方に、小坊主さんは何人？

圓「小坊主？

香「夭い、幼い少年修行者とか、いません？…いない？

圓「昨年まで、三十くらいのがおられたけれども、今、

香「じゃ、お淋しいでしょう？

圓「ええ、いまは、

香「住職、同性愛でいらっしゃるから…

そう事も無げに言った。わたしはすでにそういう告白でも受けているものと思った。圓位の顔を見た時そうでなかったことに氣付く。圓位、此の時須臾ことばなく、次、啞然の唇をへの字に堅め、一瞬目を見開き、香香美を見詰め、我に返って私を憚る一瞥をくれ、そしてやさしく笑って香香美に云った。

圓「なぜ、そんな？

香「違います？ ちっちゃい子、お好きなんでしょう？ 若いのが…別に…

圓「俗の名とともにわすれたことも多うございます。

香「別に羞じる事じゃない。…羞じるってことは、それでそれで一種の差別ですよ。僕は如何なるものであれ差別を赦さない…ともかく、眞夜羽、今日は…木曜日か…いつも何時くらいに歸って來るんでしょう？

圓「學校？

此の時、圓位はそれなりに圖太い男と見得た。何こともなかったかに繕い、あくまで冷淡な程にやさしく香香美に話す。つまりは、彼は動搖していた。香香美は自分の見立の正しさを圓位に証明させていた…

香「夕方…

圓「四時か、半か、それくらいじゃない？

香「じゃ、まず例の…なに？ 古藤…

圓「祇樹古藤記念園？

香「そこへ、行く前に…眉村さんの所へ行って、親子連れ出して、それから古藤園に行

きましようか…よろしいですか？

圓「わたくしの方はなにも、

香「住職もご一緒戴けます？

圓「よろしいですよ。今日は、見えられるという連絡いただきましたもの、一日明けてありますから

香「OK。いいですね…じゃ、…

と、香香美は立ち上がった。会計はわたしが拂おうと謂うのを圓位が執拗に断り、故、圓位が払う。香香美は我々の言い合いを捨て置く。会計口の日本的儀式、勝手にしろ、と？歩きながら圓位が眉村に連絡した。店の方に親子（和哉、一重）あるという。故、店に行く。

店への道すがら圓位がくれた警告として、眉村和哉のほう、特にわたしに悪感情を持っているらしいこと、くれぐれも注意してくれ、なにか暴言あってもそれは教育の無い田舎者のたわごとと、くれぐれもお怒りなきよう云々。

参道の脇のそれなりの広さのある土産物屋である。

見せに行くと眉村和哉、むしろ奥に居たのが飛び出して笑って私に話しかける。

和「先生！…東京の…もう、お久しぶり、…何か月ぶり？…じゃないんか…何週間間？…

そんなもんか…あれからいろいろあって…云々

遅れて出てくる一重さんは淡々と再會を喜んでくれる。

和「今日は、なんで？

圓「わたしが呼んだの。…佐伯さんの事とかね、わたしも…

一「そう…あっちもこっちも難儀で…いつ？

圓「來られたの？

一「今日？

私「ええ。さっき…

和「じゃあ、おつかれでしょう…じゃ、こっちへ、

と。店にはアルバイト？の中年の女性。三十過ぎか。乃至は友達か縁者か。

奥の事務室は五人も人が入ればかなり窮屈さを見せる。故、一重は外に店番を。客は時折入って一組二組。そんなものか。

お茶は和哉が私にそれからのことの様々に語りながらに淹れてくれた。

話の息継ぎを見計らって圓位が香香美を紹介しようとしたときに、

香「昔、スポーツされてました？

いきなり聞いた。和哉、誰ですかと問う間もなく、野球をな…ちょっと。

と。香香美おおげさに納得し、

香「それですか。やっぱり。うごきに、なんか、キレ、ありません？ご主人。…どこ？ポジション…ショート？サード？

和哉笑いながら答えてセカンドだと。

和「あれ、内野で一番下手な奴がやるの。

香「そんなことない。あれ、結構むずかしいよ。

和「やってられた？

香「ぼく、ライト。

香香美にそんな話はあろうはずなく、何を謀るか見て居ればしきりに話は高校の部活に終始。和哉柵から卒業アルバムを出してくる。

和「これね、時々お客さんに見せるの。

香「お客さん…買い物の？

和「いや、ガイド。土産物ばかりじゃ、さすがに商賣擴がらないから。ガイドもやるの。ガイドってね、あれ、観光地案内、それはあたりまえ。大切なのは自分を売るの。

香「自分を？

和「そう。いろんな、あることないこと、清盛がどうの安徳天皇がどうの雅樂がどうのより、そんなあもの、ガイドブックに書いてあるでしょ？ ほんの二三年とか、十年とか、そんな手の届く昔…台風来て、神社、損害これこれあってね、そういう島のひとしか知らない話をね、されると喜ぶ…観光地の紹介、それはもうあたりまえ。これからはあれ、AIの仕事よ。人の仕事は自分を売る、と。

香「野球やってたんやぞ、俺、とか。

和「そうそう、そういう…

香香美と和哉笑い合いながらアルバムを見る。和哉の話は盡きない。圓位が思わず苦笑したのを背中に感じた。時間にして十分ぐらいか。未だ話の途中に香香美、いきなりに断ち切り云う。

香「お父様の心配、なさない方がいい。

笑み乍ら。

和哉一瞬茫然とし、我にも返らぬうちにアルバムを返し、

香「これから、奥さんの處へ行きましょう。…眞夜羽くんの出生、はっきりするから。

和哉にいかにも自分勝手に目配せし答えも聞かずに香香美、振り向いて圓位に祇樹古藤園に連絡させ、一重にこれから園に行くと、あなたも来れないか？

一重迷うに例の三十女、人もよさげにどうぞ店なら一人で見れますから、と。

依って、有無を言わせず香香美、二人を連れ出す。

時に、二時半すぎぐらいか。

道は圓位が先導する。和哉いたって無口に轉ず。道すがら圓位もほとんどなにも云わない。和哉も黙す。故、わたしは一重と島のなにというでもない樹木なり気候なり食い物の話なりなど。歩いて二十分ぐらいか。園に入る前に香香美、圓位を振り返り見て言うに、——額田さんにも連絡しといてもらえますか？

圓「額田？…

香「今日、夜、伺うからと。

圓「だれが…

香「わたしと、…久村と…眞夜羽、それから…いかれませう？（と和哉に言った）

和哉、表情も無く香香美を見る。答えはない。

香「和哉さん、それから…住職は？

圓「よろしいですよ。じゃ、同行しましょうか？

香「なら、それだけ。

園には入ると笠原一二三が出迎えた（圓位が紹介する）。

紹介挨拶等の云々は省く。深雪の病室に向かう。途中、この園の名物たるインド・サー

ラの双樹の下をくぐるのだが、香香美思わず立ち止まって——これ、沙羅の樹？

とささやく（独り語散る）。

圓位、圓で謂う。「見られるのは、始めて？」

香「インドには…あっちの方には行ったこと無くて…」

圓位「阿輪迦王の生まれ変わりではないのか？」

香香美は圓位を見詰め、邪氣も無く素直に笑って答える「あれは、狂人のぼくの言葉ですよ…お判りでしょう？」

圓位も、悪気があって言ったようにも見えなかった。それが奇妙に見えた。ふたりはむしろ、智慧の足りない子供の打ち明け話するに似て見えた。

圓位「存じ上げてます…」

香「今も狂ってますけどね。」

圓「まさか。」

香「本当に…息を吸って吐くうちにも、僕は狂気するんです。」

言って、香香美は笑んだ。

病室前で香香美は立ち止まった。和哉にふれ合う距離に近づき、躬をよけるのも忘れた注意散漫たる彼に耳打ちして

香「あなた、まず、ひとりで…」

和「俺が…」

香「あなたが…」

和「あんな、他人の…」

香「穢された？ 穢れた？…でもあなたはなんども赦さなければならない…あなたは人間だから。あなたは人間として、壊れそうな彼女を救わなければならない…」

和「そんな…」

香「やさしく、ただ、笑って言えばいい。…元気だった？」

和「俺が？」

香「お前がいなくなって、大變だよ…」

和「俺は」

香「やさしいひとだから。貴方はできる。あなたしかできない。あなたなら…行って。…ほら。むしろ、みんなの爲に。あなた自身をもふくめた、みんなの爲に。」

香香美はそういった。唐突に、どうしようもないやさしい気配をただよわせた。和哉は呆気に取られて口を開けていた。和哉の背中を軽く押した。その儘に和哉はひとりで病室に入るしかなかった。しばらく待った。笠原氏はあきらかに香香美をいぶかっていた。あるいは、彼だけが正しかった。香香美はまともな紹介も無く、不穏なまでに尊重され、不穏なまでにひとりで美しく、不穏なまでに勝手知った庭のようにふるまう。とはいえ笠原は何も言わないのは、あきらかに圓位の連れだったからである。この法師にはそれだけの信頼があったのだ。

ドアの向こうに、相部屋の女の、うわづった聲でさかんに一週間の出鱈目な天気を誂いあげる聲だけが響いた。

わたしは香香美が動くのを待つしかなかった。

香香美はなにというでもなく、廊下に拓かれた窓から向こうの山肌を見ているだけ

だった。

ややあって振り返り、香香美は一重の腰をエスコートした。——じゃ、ぼくらも。

そう言ってノックし、一重と香香美を先頭に室内に入った。

逆光の中に離れるともなく寄り添うともなくささやき合う夫婦がいた。和哉の顔は落ち着いて、そして深刻だった。深雪はただ、思い出にふけるような眼差しを寢臺に身を起こした自分の足の方に投げていた。

ふたりの向かいに四十近い女が明日のモスクワ（モスコー、と片假名發音で云った）天気を叫んだ。

一重が和哉の傍らに立ったとき、不意に顔をあげた深雪はいきなりにその顔を崩した。見えない手に骨ごと握りつぶされたように。両手に覆い、彼女は泣き崩れた。

一重は息子を押しつけるように嫁を抱いて、もらい泣きに泣きはじめながらその頭を撫でた。

笠原は圓位の背後に沈黙した。ただ冴えた眼差しに見守る。

圓位は和哉にささやいた。

「話しあわれたの？」

和「いや、…なにも。…話したけど…なにも、…ね？ そんな、話すこと…いや…

圓位を振り返り、「ぼくら、むしろ、なんか、話すことありました？…べつに…ね？」

圓「そうな。…べつにな…

和「心の行き違いと謂うか…なれない…あったことも無い…状況？…そういうのかな…
なんか…そういう…頭の中が…

圓「こんがらがって？」

和「でも…

圓「もう大丈夫？」

和「いや、これからもっと、いろいろ、あると思いますよ…もっと、…けど…

圓「じゃ、もう大丈夫な…

和「ならいいけど…でも、…ね？…でも、…ん。…ね？」

会話にならない途切れ途切れの会話が續き、續くともなく途切れ、途切れるともなく續く。

香香美は深雪が泣き已むのを待った。

すぐかたわらのわたしは彼の、例の極度に甘い芳香を嗅いでいた。

しゃくりあげ、しだいしだいに落ち着いてゆく深雪を香香美は見ていた。

いたわるように。深雪は一重に自分の錯亂を侘びた。

ひとりになって、彼女は落ち着きを取り戻していたのだった。

もう会えない。あの子にも、家族にも。そう思うと、もう、堪えられないくらいにつらかった云々…

ようやくに時に笑みがこぼれさえし始めた比に、香香美が不意にやさしく云った。

深雪に。——ね。元バレー部のさ、…ひろむ。…あいつ元気？

そのときに深雪は香香美を見上げ、そして初めて見る人間を見、はじめて聞く音を聞く目をした（もっとも、此の時初めて深雪は彼を視野に入れたのだが）。

須臾、黙した唇が何か言いかけた…云い淀んだ。ともなくに言いかけ、終にはなにも云

わない。

香香美を凝視していた。

深雪の唇がささやく。ふるえの無い常音で、——あんた誰？

香「ひろむ。あいつどこにいるの？

深「定光紘夢？

香「まだあってるの？

その瞬間深雪は一重をはねのけ、逃げ出す様に寝臺に立ち上がり、天井に頭をぶつけそうになる。

眼差しは香香美をにらみ続けた。明らかに忿怒の深雪は極度のささやき聲で怒号を（…としか言えない声を）喉に發した。

「あんたたちみんな、グル？

謂う。

「全部、お前ら…どの面下げて…

謂う。

「莫迦にするのもいい加減にしろ…素直に…

謂う。

「あんたら、みんな、みんな…

圓位は眉をしかめた。一重は顎をふるわせ深雪を見守る。和哉は唾然とし、わたしは一体なにが起きているのか判らなかつた。笠原の顔は見なかつた。その存在さえ忘れていた。香香美はひとりで静かに笑んで、そして云った。「紘夢の話、全部知ってるから…僕ら、…全部、あなたも云っちゃえば？…豚。

と、吐き捨てるようにその豚の單語を謂い、

「糞まみれの豚女。

明らかに、香香美は深雪をせせら笑いながらいった。

詞のおわりまで待たずに深雪は喚いた。

「阿阿阿阿阿阿阿阿阿…

と、濁音付きで、

「阿阿阿阿阿阿阿阿阿…

と。

笠原が我に返って深雪を取り押さえようとするに、深雪は頰れるように寝臺に座り込み、そして黙し、やがてささやく。

「今はあってません。わたしの頭が可笑的いからです。…でもその笠原さんが毎日お尻に腕突っ込んでくれます。

笠「なにを…

深「みんな豚ですから私も豚です。わたしのせいじゃありません。和哉も豚です。紘夢も豚です。みんな豚なので…

香「お腹の子って…

深「紘夢に決まってる…莫迦？

香「眞夜羽は？

深「紘夢でしょ？…和哉がみんなに嘘謂うからね。だからみんなが嘘つくからね…

和哉は顔を覆った。身を上げだす様に窓に背を靠れた。

圓「じゃ、奥さん、ご主人をだまされてたの？」

深「だましたのは和哉でしょ。

深雪は叫び、和哉をにらんだ。

深「お前が騙したろ。糞も豚もどいつもこいつもみんな、あんたが一番だましたろ。

香香美は一重に云った。

「定光紘夢さん、って、ご存じですか？」

ただ目を剥き、ただ唇を一文字に結び、ただ怯える一重は無言で頷き、

香「奥さん…もともと和哉さんの高校時代のお友達の定光紘夢さんと付き合いがあって…

深「誰だよ！

深雪は叫んだ。

深「だから、…お前は…阿阿…お前は！…阿阿阿！…だ。…えは！…阿阿…えわ！…阿阿阿！

歯ぎしりしながら、同時に閉じた口蓋に叫ぶ深雪の言葉はもはや彼女自身にしか聞き取れなかった。

香香美は笑いながら云った。——行こう。

歩きさる香香美に圓位だけが随う。立ち止まり、振り返り見て眉村親子の腕を叩く。一重は表情を変えずに息子の腰をおした。顔から掌をはずさない息子は（向かいの患者の？）ゴミ箱かなにかを蹴飛ばした（或は汚物入れ？ プラスティック製、蓋あり）。私は急ぎ足に香香美を追った。笠原がどんな顔をして居たのかは見なかった。ともかく彼は非常ボタンを押したに違いない。階段に介護士がふたりばかり駆けあがるのにすれ違った。振り返れば吐きそうに手で口を押さえながら、和哉は吐き気のまるでない眼で何を見てもなくわたしたちに従った。受付でさわぎに惑う事務員等に有無を言わずタクシーを呼ばせ、香香美は親子二人だけ乗せた。これから茨に行くから。先に波止場で待っている、と。

故、運轉手には埠を謂う。

わたしたちは歩いて行った。

香香美はなにも云わなかった。あるいは憂鬱なのか。すくなくとも笑んではいなかった。

目つきは曇りもなく想えた。心は慥かに、いまだ彼の頭の中にあった。

私も圓位も、謂うべき詞を終に見なかった。

古藤園からそのまま場所だけ逸したように、なんのかわりもなく親子は埠に立っていた。

波止場の海邊、松の木の下で和哉は圓位に告白した…

和「真夜羽…あれ、僕の子じゃないんで…

圓「そうなの？…あれ、奥さんの世迷い言なの？ あなたも知ってたことなの？」

和「僕に子供、できるわけなくて、

圓「なんで？」

和「無精子症…

圓「夢精？」

和「じゃなくて（と思わず和哉は笑った…じゃったら、ええんじゃけえどが、…と、）精子、ないんですよ。透明で、

圓「なんで、それ…いつ知ったの？ まだお若いから、それに結婚してすぐ、作られたんじゃない？ あの子

和「最初のころ…子供のころ、…莫迦な田舎の子供の遊びで、オナニーして。ただの冗談。あくまで遊びで。友達と、…見せたの。十二歳じゃない？ 小學生のころ…出てくるのが、紘のは…それ、その紘夢と…あいつ、幼馴染で…

圓「その子と？

和「違うんですよね。色も匂いも。匂いは微妙に、…でも色はもう全然違うでしょ？ で、どうも、あいつのと違うから、おれの、出して、お前の穢い色な、と。俺の綺麗な透明で、と。お前の濁ってるなど。病気なんかと、紘の、笑って…けど、性教育？

圓「学校の？

和「で、あれそもそも白濁液でしょ。

圓「そうな。

和「それで、おかしいのは俺だと。…調べるでしょ。自分で、そうしたら、

圓「本で？

和「図鑑とか、難しいのな、

圓「お母さんは知ってられた？（と一重に言った。一重は例の表情のままにも答えなかった。話の間中彼女はただ圓位法師を凝視するのだった。）

和「言ってないからな…何にも、…ま、恋愛しますよね？…でも、ま、そのうち結婚して。それから子供生まれない、それいいのかなど。…いいかと。そういう夫婦も、

圓「現実、いらっしやるね。

和「けど、いざ、自分が結婚して…それ、悪いなと思って。あいつに對して。母にも。けど、だから、あいつが、やっぱり子供欲しくて、

圓「罪悪感？

和「それは、

圓「でも、そんなの感じる必要ない。夫婦、分かち合って、

和「です。ですよ。そうなの。で。俺、云ったんです。あいつに。結婚してから、

圓「なじられた？

和「いや、

圓「泣かれた？

和「じゃなくて、いいよと。それでいいよと。ふたりで生きていこうかと。こども、いてもお金かかるしなど。で、それから

圓「よかったじゃない。

和「笑ってね、あいつ。笑って、

圓「いい奥さんじゃない。

和「だから悩みますよ。

圓「なんで？

和「だって、…俺のせいで、あいつが…あいつが他の奴となら當然生めたもの、産ませてやれない、

圓「仕方ない。

和「女の幸せ奪った。

圓「出産だけが女の幸せか？」

和「本人らの氣になってよ（と和哉は一瞬聲をあららげた）。そんなもんじゃないよ。

圓「それで、どうしたの？」

和「紘に遇ったの。年末、あいつの實家近く、俺だけ遊びに行っただけで、話して

圓「その子と？」

和「話してるうちに、あいつも、俺の嫁、もちろん顔くらいは知ってるから、

圓「同級生だもんな。

和「學年違うんよ。あいつの方が、二こ下…で、俺、思ったの。

圓「何を？」

和「紘に。深雪に。あいつに、お前、種つけしてくれんかと。

圓「なにを馬鹿な。…それ、奥さんにもなにも云わずに、

和「莫迦なんですよ。でもね、追い詰められてるから。俺も。あいつも。

圓「紘はいいと云ったの？」

和「まさか。

圓「じゃ、どうした。

和「深雪に云ってみたんですよ。

圓「ほかの男に種漬けされろとか？」

和「してみんかと、

圓「犬や馬とちがうんで。

和「莫迦かと。

圓「当たり前よ。

和「阿呆かと。

圓「だろな。

和「けど、いろいろ話し合おうんですよ。ぼくら。どっか孤児院みたいな行ってもらって来るかとか、そういうんも含め…けど

圓「けど？」

和「やっぱり、すくなくとも片方血がつながってる方がいいんじゃないかと。

圓「誰の意見？」

和「俺。悪いんは全部俺だから。俺がまとなら全部よかったんだから。

圓「そんなこと言ってない。勝手に自分を責めろとも言ってない。

和「例えば、…反抗期？ 貰い子が、例えば暴力ふるったと。俺や。深雪や。…で、赦せます？ 俺ら、結局後悔するんじゃない？」

圓「そんなもん、決めつけるな。現実には、

和「それはそうなんですよ。人さまは。でも俺らもそうかどうかはわからない。俺には自信がない。たぶん、他の子にすればよかったと思う。たぶん。でも、人の子は犬や猫と違う。だから、せめて、

圓「それで？」

和「深雪に、云った。俺、せめてお前の血のつながりの子供だったら、自分の子、俺らの子だと、愛せるぞと。

圓「で？」

和「その時は、それ、本当にそうだった。…いや、いまでもそう。本当にそう。けれども、
圓「だったら、
和「それであいつに言った。紘に。頼むと。女にしてやってくれと。
圓「なにを、そんな阿呆な言い方を…
和「阿呆なんです。俺ら。でもね、
圓「紘は？ 何て云った。
和「考えると。
圓「そらそうよ。
和「で、次の日電話くれた。いいよと。精子やると。
圓「そいつは説得しなかったの？ 阿呆のお前らを。
和「いや、しましたよ。あいつの爲にいうけど、今の住職の倍以上阿呆阿呆謂うて、でも、やつ、おれの親友だったからね…
圓「どんな親友よ。
和「あいつは悪くないから（と、吐き捨てるように謂う）。あんたは解ってないから。…あいつは…
圓「で、奥さん、わたしたの？
和「そう。ホテルで、廿日市の…ちゃんと、検診行って、一番危ない二日間。
圓「二日も？
和「泊まってないよ。
圓「いっしょよ。…でも、あなたも、心おだやかじゃないな…
和「いや…
圓「何？
和「祈ってた。自分とかじゃなくて。
圓「何を。
和「あいつの…深雪の幸せ。それから…
圓「それから？
和「感謝。
圓「深雪さん？
和「も、そう。それと、紘に。でもね…やっぱり…なに？ 違うよね。子供生まれて。眞夜羽…紘も…恩人だから…これから永遠に、ずうっと秘密。秘密だけれども、實の親父じゃない？ だから、
圓「あわせた？
和「生まれてすぐね。
圓「なんて言った？
和「紘？
圓「彼は？
和「他人みたい。本当に。まるで、あいつ、全然他人見たい（と、和哉は啜り泣いた。しばらくして）、おめでとう（又啜り泣く）。
圓「それじゃあ、何も…
和「問題ない。けど、そのときも思ったけど、やっぱり、男と女は男と女でしょう？ 子

供つくるための、それが男と女で、それがつがいの仕事なんじゃろ？

圓「また、わけのわからん…

和「あいつら、やはり、俺と深雪とは違う、なんか、親しさ、あるからね。

圓「氣のせいよ。僻目よ。

和「あるから。つながったつがいの。

圓「阿呆なこともやすみやすみ、

和「苦しんだのは俺ですよ。俺が一番ですよ。俺だけじゃない。でも、俺もよ。やっぱり俺もよ。嫉妬じゃない。だけじゃない。なに？…いや。本当に苦しいんよ。

圓「それで眞夜羽につめたくしたんか？

和「まさか。あいつ、目に入れても痛くない。あいつの爲なら死ぬ。

この時に一重がいきなり、表情を変えない儘に言った「それはホント。

圓位は聞いた。

一「この子、…あのこまだ、生きるも死ぬも判らないのに、よく教えるのよ…酔っぱらってよ。機嫌いい時にね、お前な、わしとボートに乗って、どっちか一人死ぬ。ひとりしか助からん、どうするかと。眞夜、こたえられないでしょう？ そしたら、謂うの、その時に、お父さんごめんと謂って、迷わず親を見捨てる。自分生きる爲親を棄てる。それが一番の親孝行だと。それからお前がちゃんと生き延びて、何が何でも生き延びてから、お前が大丈夫になったら死んだ俺の事を思うて泣いてくれと。それが二番目の親孝行…それ、まあ、むちゃな話してるけど、ああ、此の子も人の親になったんかなと…でしよう？ どこにいますよ？ 自分大事で、子を見捨てて自分が生き残るんが…

圓「眞夜羽くん、かわいもんな（と故意にしみじみと圓位は和哉に）

和「二番目のも…

圓「お前が？ 絃に？

和哉は黙った。

圓位も黙った。

やがて圓位は云った。「違うの？

和「俺は知らない…一人で…でも、あいつは、たぶん、…

圓「絃の子か？

和「俺、なにもあいつに聞かなかった。…おれら、遂に、自分の子供出来たで、と。あいつ…

圓「よろこんだ？

和「わからない。けど、ちょっと変だった…

圓「變？…

和「わからない…俺の子？…ちがうかな…わからない…けど…

圓「奥さん、連絡取り合ってた？ 彼と。

和「それはもう。だって、…あいつの奥さんとも…だって、…俺ら…あいつ、俺らの爲にしてくれたんだから、いっそ、それは全部、家族ぐるみ、

圓「じゃ、いい。

和哉は黙した。

圓「わからないんなら、黙っとこ。なにもなかった。あんたの子よ。…どっちもな。

和「俺、全部嘘。

圓「もういい。

和「なんで？ 俺…なんで？

圓「もういい。黙っとれ。

圓位はそういった。

時に4時半すぎ。店に向かった。

夕方になればさすがに店に客はない。参道も閑散。

店にすでに眞夜羽は歸っていた。眞夜羽、ひとなつっこくわたしに駆け寄り、駆け寄り替えて背後の香香美に警戒し立ちどまる。

もはや眉村親子に香香美を紹介する余裕はなく（そもそも、まともな紹介さえ受けて居なかった。我々はすでに忘れて仕舞っていたのである）圓位も黙したままだった。

わたしが何というべきか迷ううちに香香美は云った。

香「比呂くん？

眞夜羽は香香美を茫然とみつめる。

香「これから一緒に、茨のおかあさんとこ、いこうか。

眞夜羽「これから？

香「こわい？

眞夜羽「こわくないよ。あれ、ぼくのうちだよ。ここもうちだけど、…ここはうちじゃないけど、うちはここにもあるけど、そこも、ぼくのうちだよ。

香香美は邪氣も無く笑った。

香「じゃ、茨のうちに歸って、それから、宮島のうちにも返ろうか？

眞夜羽「遠いよ。

香「平氣だよ。電車好き？

眞夜羽「いいよ。好きじゃないけど。克美くんは好きだよ。

香「じゃ、行こう。電車、早いよ。

眞夜羽「飛ぶ？

香「飛びはしないな（と笑う）。

香香美は云った。彼が眞夜羽を連れて行くので、我々は従うしかなかった。一重たちはアルバイト(?)の女になにも伝えなかった。勝手に閉めて歸る、ということなのか。あるいは、そんなことにさえ氣は回らなかったか。

電車の中で香香美は一人陽氣だった。

向かい合わせに座るタイプの座席に座り、通路挟んだ左に眉村和哉と一重が、右に圓位と私、向いに香香美、そのとなりの窓ぎわに眞夜羽が座った。

眞夜羽が眉村親子の席からこちらに移ったのは單に彼が香香美になつたからに過ぎない。東京詞の麗人は彼にもめずらかったろう。眉村親子はなにも話さなかった。ひとり沈痛の氣配のあったのは一重で、和哉はむしろただ自然に流れる風景を見た。時すでに5時をまわり風景は次第に昏い色のみ濃くした。多くの時間、香香美は眞夜羽の子供らしい会話に付き合った。彼がなんら轉生の話にさぐりをいれようとししないのを私は時には、かすかに恠しんだ。

福山駅で茨線に乗り替える。車両二兩三兩のローカル線である。廿日市駅から茨駅まで

時間にして二時間に満たない程度か。

すでに周囲が闇に包まれた頃合いに、香香美は圓位に話しかけた。

——むかしものなどいひし、をんのなくなりしがゆめに、あかつきがたにみえてはべりしを…

独特の鷹揚をもって発話されたので最初、香香美が哥でも詠みだしたのかと、わたしは思った。

圓位は口元でだけ笑った。ささやく。——それは？

——忠峯の…壬生ノ忠岑…ありますね。そういう詞にまとめられた…

——そう、…かな…

——昔、女を知っていて…

——それは、たくさんご存じでしょう？

——そうでもない…本質的には、僕はあなたと同じ…同性愛の方で…

——そう？

——そう。…女も、…求められるので。最初は。尤も、…ま、いい。

ともかく、僕が十四歳くらいかな？

——中學生？

——そう。その頃に、知ってた女で、…

——ま、女、というか、少女、よね？ 年のころ、

——僕はね。十四…くらい。向こうは二十…いくつだっけ？（と香香美は唐突にわたしに言った。）

——俺？（わたしは若干めんくらって応えた。）

——違う…お前は知らないな…そう、幼馴染じゃなかった…いや（と圓位に）付き合い長いので、不思議にそのくらいから…もっと小さい頃から知ってる気がする。

——僕と彼（と、わたしは圓位に言った）大學の時に逢ったんですよ。まさかこうなるとは。…死に水取るみたいなね。

何ってます、と圓位。そして改めてしっかりと笑む。

香香美は謂う。以下は香香美と圓位の会話

——たぶん二十の三とか四、…今思えば子供に毛のはえたようなものなんだけど、當時としてとても大人に見えた先生がいて。

——先生？…学校の？

——そう。彼女が僕に戀をした。…

——なにか、された？ 言われた？

——なにも…けど、わかるでしょ。目つきで。…仕草。振る舞い。…僕は気附いていた。友達も気づいていた。特に女の生徒たち…あれ、彼女たちの誰かが密告…ちくったの。自分たちの両親たちに。そこから学校の運営側に、…

——なんと？

——たぶん、あの先生いやらしいことを香香美くんにさせてますと。そんな。呼び出されて。學年違う、五十いくつの男の先生に。担任と、教頭と、校長と、その四人で…ぼく、その頃には母、亡くしてましたから、両親もなくて僕だけ。

それで、話して…

瀬戸先生…と、というのが、その先生の名前なんですけど。そのひとに、いやらしいことされたかと。

答えて、されてないと。

かくさなくていいんだよ、と。どんな、いやらしいことされたの？ と。

いや、本当にされてません、と。

彼等、それで逆に納得したの（と、香香美は鼻にかかった笑い聲を立てた）。この子はされたんだなって。されて、傷ついて、だから、むしろかたくなに隠し通そうとしている、と。

面談終わった時も、次の時も、友達の見る目が変わった。なにを教師に報告された譯じゃなくて、ただ、呼び出された、あれ、瀬戸先生との一件だけ、と、…ね？

——差別的な？

——じゃなくて、…

——腫れ物に手をふれる？

——じゃなくて、…

——穢れ者扱い？

——犠牲者あつかい。ものすごく。大丈夫だよ。気にするなよって。友達は…女の子たちはもっと、…なに？ 壊れそうなものを慈しむ感じ？ 両手で抱いて。掬いあげて。泣きそうになりながら。そういうの。…笑う。

——なんで？ なにが可笑しくて？

——だって、どこに犠牲者がいる？…おれ？ じゃないと思うよ。瀬戸先生の方じゃない？…彼女、たぶん非常に倫理的な人で、すさまじくひとりで苦しんだと思いますよ。自分の思いに。

——で、その先生は、…

——死んだ。

——自殺された？

——じゃなくて、交通事故。

——交通事故…ふらっと飛び出したとか？

——じゃなくて、…その面談があって、次の日瀬戸先生お休みになって、次の次の日かな。ずっと、その間学校に来てなかったけど。…テレビで見た。交通事故のニュース。

——ニュースで？

——夕方の、…幡谷の交差点に深夜飲酒運転の車が突っ込んだと。幸い時間的に人通りなかった為、犠牲者はひとりだけだった…即死だった、と。犠牲者の顔写真、出ますね？

——出ますね。

——実名も出ますね。

——出ますね。

——美佳子さんだ…名前。…瀬戸美香子…

——思い出した？（と圓位は静かに笑んだ）

——そう、思い出した。あれ、…写真、…顔の…運転免許の写真だったのかな…あれ、犯罪者みたいですよ？ 犠牲者なのに。やった方みたいな顔、それから名前の子幕…瀬戸美香子、…二十六歳、か…

——忘れられない。

——忘れていた。今、思い出したただだから…今、尾道通ったでしょ。出身、たしか広島
島の尾道…こんなところに生まれたのか、…と。來るときは氣付かなかった。忘れたま
まだったから。今は暗くて見えなかった。せっかく思い出したのに。

いのちにもまさりて惜しくあるものは

みはてぬ夢の

醒むるなりけり

その歌を知ったときに、ふと彼女の事を思い出した。もしも死後に魂があったとしたら、
…彼女は自分の引きちぎられた亡骸を見た後、たとえば雲の上の月の裏の黄泉の國
にでも？ 上りながらそう歌ったかもしれない。

わが魂を君が心にいれかへて

おもふとだにも

いはせてしかな

ぼくはそう答えるべきだったろう。…

もろくともいざしら露に身をなして

君があたりの

草に消なん

もはやあなたの好きにしろ…すでにあなたは滅びているから…

——…尾道、じゃ、せっかくだから、明日でも、行ってみられる？

——いや…もう見たから。

——見えないでしょう？

——もう…実は、僕、今、嘘ついたの。

——嘘？

——嘘。…無數に…おびただしく群がって、貪り喰らいあうみたいに変態に変態をかさ
ねる死者たち…熾嫩擣多癡…その群れの中、僕の眼の…彼等の眼に見る僕の眼の、その
群れのなかに彼女、いる。

此の時圓位は何の反応も示さず、むしろいよいよやさしくに笑むのだった。

彼は云った。

——僕を見てる。…すでに、記憶も意識さえも無いのに、冴えた儘。醒め切ったまま、
腐った肉と血を玉散らせる…

はなのえをゝりつるからにちりまがふ

にほひにあかず

おもほゆるかな

これは…赤人？…だっけ？…と、ひとり語散るように香香美は云った。

茨市に着いたときはすでに7時を過ぎていた。空は昏い。地上も暗いからである。鄙の
田舎の街はずれの駅前であって、あるいは街燈の光があるだけでもこの町の近代化の證
しとするべきなのかもしれない。

駅前広場に出て当然一台たりとも待っているわけではないタクシーを、どうやって探した
ものかわたしが思案しかけたときに、わたしの名を呼ぶ聲がした。

振り返れば他には車など蔭だにもないターミナル道路の隅に一台のプリウスが止まって

いて、その前に降りた高長氏が手を振っていた。

高長氏は歩みよりながら私に言う——ひさしぶり…でもないね。

笑った。

高長氏、眉村親子にも笑み、久しぶりの再會を自然な挨拶にながして眞夜羽の頭を撫でた。

高（わたしに）「今日は、結局、何人になられるのか判らなかつたから、まだタクシーも呼んでないんですよ。

私「総勢…（と、もう一度数えて）6人…

高「ちょっと、のれないから、…

—「いや、大丈夫…

高「タクシー呼ぶからな、

—「眞夜はわたしが膝に抱くからな、

圓「ちょっと狭すぎるな、

高「待ってて。車、すぐ来るからな。

高長氏電話し、もののみごとに二分の間なく來た。ひととおりの紹介さえ終わらぬに、である。故、高長氏が此の時に私の口から知ったのは圓位が嚴島の住職であること、眉村家の相談役となっていること（これらは高長氏の方では話に聞いていたようだった）、それから香香美の名前、…それだけ。

車に乗る前に高長氏曰く「うちに來られてもいいんだけど、大人數だから狭いかな…どこか、店で話しましょうか？

香香美は云った「祇樹園…じゃない、偕樂園へ行きましょうか…」

高「芳井町偕樂園？…お母さんのところ？

香香美「とりあえず、挨拶だけ…まあ、お手數なんでしょうが、僕ら、やっぱり、ご年配の方から挨拶だけさせてもらっておかないと…

高「そう？ 結構、距離あるよ？

香「親父の遺訓なんでね。年長者から立てろとね。一應はね、…草葉の陰で叱られます。と謂って香香美は笑った。

高「そりゃ、すごいな（と笑う）お武家さんか何か？

香「武家じゃないけど、ぎりぎり武家みたいなもんですよ。武蔵野の百姓だからね。

邪氣も無くふたりは笑った。

見ると車の向こうに額田比呂子が立っていた。比呂子は頭を下げる。助手席に座っていたのだろう。

高「乗るとき。

声をかけた。

高「これから、すぐ、偕樂園行かれるそうじゃから。

そして我々は芳井町偕樂園に向かった。

タクシーには眉村親子と圓位が乗った。

高長の運轉には私、香香美、そして眞夜羽が。もちろん比呂子も。

後部にわたしと香香美の間に眞夜羽はすわったのだが、こちらがよそ者じみて仕舞う程に（尤も、事實としてそうなのだが）眞夜羽は比呂斗として振る舞い、ごく自然に比呂

子は母として振る舞い、ごく自然に高長は親子の中に入り込めそうで入り込めない新参者の繼父じみて話し、笑い、おどけ、話し、時にさわぐ。

比呂子「あっちで、いい子にしてるんか？」

眞夜羽（比呂斗）「最近、喧嘩ばかりだよ。

比呂子「ちょおっと、…あんた、大丈夫？」

眞夜羽（比呂斗）「でも、お母さんが…眞夜母さんが、頭おかしくなったからね、

比呂子「だめよ、そういう…（振り返り、我々に）すみません、此の子、…

高「ぼくらが教育してわけじゃないから、どうしても、…

比呂子「そういう言い方も失禮なんだよ。眉村さんとかに。…（我々に）すみません、

眞夜羽（比呂斗）「お母さんたちも喧嘩好き？」

比呂子「あんたがそういうことを謂うから（と、行って笑い）

眞夜羽（比呂斗）「でも、おなかすいたよ。

比呂子「食べてないの？」

眞夜羽（比呂斗）「今日は未だ。

比呂子（高長に）「ちょっと…ね？ こういう感じよ？」

眞夜羽（比呂斗）「でも、大丈夫だよ。

比呂子（眞夜羽に）「もうちょっと待ってて。今日、歸ったら、作ってるから。いっぱいね、…すきなだけたべればいいからね…

云々。

私自身は眞夜羽に對してもっと一物ある雰囲気を見せるものかと秘かに恐れもしていたので、呆気にとられるよりもしろ安堵していた。眉村家の緊張感の後だったので、こちらこそが實の本当の親子のようにも思えたのである。

香香美は眉一つ動かさず、窓の外を見るだけだった。話を聞いているのかどうかさえ疑問だった。

芳井町の偕樂園に着いたのはおよそ7時半くらいか。面會時間を過ぎているのではないかと問う私に高長は基本8時半までだと謂った。

高「消灯時間、ここは早くて…田舎だからな。それでも9時45分、か。早くもないか。…日曜日とか、年寄り多いから大河ドラマ見たがるでしょ。それに、むかし時代劇だいたい8時くらいからじゃなかった？ それでそういうテレビの時間のあと、ちょっと間おいてから、消灯。…でも、10時でも11時でもいいですよ。連絡しとけば…そのあたり、家庭の事情には融通きかせてくれる…池田の兄さんのとこなんか、なあ（と比呂子に）
いつも、12時じゃとか謂うてる…あの奥さん、店やられてるから、それから家歸ってから行かれるから、だいたいそうなるみたいでね、…旦那のほうは、抛ったらからしだからな、實の親なんにな、…

比呂子「仲、悪いんだよ。もとから。あそこの親子…

受付に年配の女性が出、比呂子を見れば瞬間に待っててな。それだけ云って猪原を喚ぶ。同級生のよしみで彼女等の担当と化した、ということなのか。

猪原、今、広間にいられるから（…テレビ見てられるからな）ちょっと、連れてきたげる。そう云って笑う。

わたしたちはロビーのソファに座って待ち（と云って、このあたりから已に故意に館内

を「家庭的」につくってあるので、受付の冷淡さは受付そのもの以外にはない。)車いすに惹かれた額田朱美を見た。

猪原は頭の上からさかんに朱美に話しかける。うれしいなあ、おばあちゃんなあ、比呂ちゃん来たよ、うれしいなあ…

眞夜羽はおそらく、朱美を始めてみたに違いなかった。仕方ないとは言え知性の影を失った(とは言え、まだ、我々のすこし年上くらいの年齢、そして圓位の遙か下なのだ…)老婆(見かけはまさに、老いさらばえた婆さまそのものである。しら雪被りの細い髪が力なく毛先を綺羅らがせ寐ぐせに起こされた地崩れじみではねあがり、それがただ目に痛く思えた…)

比呂子は立ち上がって云った。「あれ、うちの母です…

と、一応は母に圓位から紹介する、大声で、耳に口を近づけ、宮島の…な? 知ってる?…な?…嚴島の…な?…大鳥居の?…な?…広島の…な? 神社の…な?…お寺さんの…な?…じゅうしょ、…お坊さんよ…な?…わかる?…な?…ありがたいで?…な? 云々。香香美を紹介しようとし、実際はほぼ何の紹介も無かったのに思い當ったのだろう。いきなり香香美を振り向き見た比呂子を捨て置き彼は云った、——あれ? と、香香美は猪原に、「もうひとりいるじゃん?

猪原、戸惑い、「もうひとり?

香香美「いるじゃん…と、猪原を馬鹿にしたようにも笑んですぼめ突き出した口をぱくぱくさせた。

香香美「これ…と、もういちどぱくぱくをくりかえし…(あの日靈兒(比流古)のことだとはすぐに、わたしは氣附いた)「じゃん?

香香美は云った。「朱美さんのいいひとなんじゃない?

ひとり笑う。

私が見たのは一向腑に落ちない高長の横顔と、瞬間(…というか、既に)肩間に顯らかな緊迫の不穩をさらした比呂子の顔だった。香香美にむけてねじった顔を、比呂子はすぐさまに朱美の右肩の方にそむけた。

猪原(香香美に)「つれてきます?

香香美「連れてきてよ。…俺ら、せっかく東京くんだりからここまで来たんだよ…失禮じゃん?

猪原は須臾不快を眼と唇と鼻の穴に素直にさらして、…じゃ、と。そう云って踵を返した。

香香美は一人騒いだ…やっぱり、俺らもさ…(と私に)何時間?…五時間…違うか、…でも、トータルそれくらい? 新幹線に電車に…いや、宮島からだからさ…ぜんぶ、何時間?…やっぱりさ…

圓位が不意に激高し殊更ひそめた聲につぶやく。「あんた、…何を。…

香香美「会いたいよな。…お前(これはわたし)逢ったっけ。…って、言ってたよな…から、俺も知ってたけど、(と故意に侮辱的に笑い)猪原は奥から車いすにそれを連れてくる。

猪原は口でだけやさしく笑み、眼は香香美への敵意を隠そうともしない。

比呂子はわたしたちそのものから目をそらし續けた。

日靈兒は車いすの上に變形した楕円の躯体を今日も色柄違いのTシャツとショートパンツに包み、ゆがんだ卵形の、あくまで躯体と地續きの頭部の丸い眼を見開いて、そして間の口を魚じみて開け閉じする。

かたわらに眞夜羽は顯らかに怯えた。

圓位の顔は見なかった。眉村親子をも。

背後に、一重が息を飲んだのだけ知っている。

香香美は笑んで、そして膝間付くように朱美のまえに身を倒し、だれにも聞こえるようにはっきりと謂った…來たよ。…よかったね。

意味も解らず朱美は、壊れた笑みを反射的に作った。笑いのない、からっぽの笑い顔。

顔を上げ、香香美は日靈兒に言った…大聲で。「お母さんに逢えたよ！ 嬉しいね！ お母さんだよ！

言った瞬間に比呂子はその場に頽れた。

その時、彼女は朱美の車いすの手すりに額をぶつける。

首をのけぞらせ、顎を突き出す。

比呂子は顔を上げていた。上を見ていた。顎が引き攀った。ややあって比呂子が、頽れた儘香香美に叫んだ——あんた、誰だよ！

息を吸い込み、叫ぶ。「誰が呼んだんだよ！

もう一度、息を深く吸い込んで、叫ぶ「お前、誰だ？

「誰？…冷静に、そしてやさしい聲で、あくまで冷淡に香香美は云った。「紹介してよ。この化け物だれ？

「わたしの…

「なに？

「知ってんだろ？ 誰に、…お前、誰に…誰が教えたの？…だれ？

「だからこの穢ねえ化け物誰だよ！

「あたしの子供だよ！…わたしが生んだんだよ！

香香美は聲を立てて笑う。顯らかに悪意があった。謂う。

「親父は、…

「比呂斗だよ！

言った時に、香香美はひとりで、ただ無防備なまでに侮蔑的な、赤裸々な笑い聲を立てた。

ながい笑い聲だった。

事務室の奥から介護士がふたり顔をのぞかせた。

何う。

猪原は自分が侮辱されたかにも香香美をにらんだ。

圓位がつぶやく——何を？

「何を云ってる？…この男…なにを？

香香美は自分が笑い終わるのを待って、わたしたちを一度見まわして云った。

「比呂斗…額田比呂斗…お兄さんの方ですよ？ 朱美の子の比呂斗…あのひとと、比呂子さん。そういう関係にあった…

眉村和哉がちょっと、…と。そう言いかけ、香香美「肉躰関係。…戀愛関係…お好みな

ら禁じられた純でせつない結ばれ得ない悲劇の愛と？…（せせら笑う）

比呂子はもはや何の反応も示さない。ただ、あからさまな憎悪の眼をだけ香香美に向けた。

脛と、鼻の穴と、顎だふるえつづけた。唇はかたく結ばれて。

香香美「で、できちゃったと。能無しの和哉と違ってね。…深雪が大好きな紘くんの方みたくにね。できちゃったと。比呂子は産むという、比呂斗は…そこらへん、いろいろあったんでしょ？ 朱美さん含めて…（と、思い出したように比呂子にささやく）毀したんだよ。あなたが…あなたたちが、…お母さんを…

激怒の圓位が香香美に何か言いかけた。香香美「壊れものはとりあえず捨て置いて、…と。ともかく生んじやったと…その、比呂斗をね。…複雑な…合併症…なの？…この異形（香香美笑う。）解剖しなきゃわからないか？ なら殺しちゃう？（猪原なにか怒鳴りかけ）死んだ…ね？（と、朱美に、やさしく）死んじやった…ね？（比呂子に）お前の彼氏…首切って（比呂子は此の時から齒ざしりを始めた）手首切って…（香香美撥ねるように笑う）足首切って…（高長が香香美を制そうとしたのか、動かない儘片手を上げかけた）おまけに顎括って…（つぶやくように香香美は言い、眼を閉じ、自分の鳩尾あたりに手を合わせる。黙す。不意に目を開き、振り返りて圓位に言った）俺ら、いい迷惑だよな？ 香香美は笑った。

圓位はもはや何も言わなかった。

忿怒の顔をしていたに違いない。わたしは敢えて、傍らの顔を見なかった。

じゃ、…と。

背後に聲がした。和哉だった。

「比呂斗くんの前に、…もうひとり？…じゃない。…比呂斗君が生まれて、…なに？…じゃ、車椅子の子、だれ？

香香美。「いや、だから、あれ、比呂斗君。

和哉「でも、

香香美「死んでないですよ。だから。…でしょ？

香香美は猪原に言った「それ、比呂斗でしょ？

猪原「あんた、誰か知らんけど、さっきから云っていい と悪い事、人間、あるからな？

香香美「…好きにさせろよ（手を振り笑う）、ともかく、あれ、比呂斗。

和哉「でも、死んだって…命日だって…

香香美「所詮フェイスブックでしょ…心の命日ってことじゃない？…死んでないの。心の中で死んだことにしたの。たとえば、是は人間の比呂斗くんじゃない。是は、私の罪。罪の形。比呂斗兄さんと育むべきだった命はもう、死んでしまったのよ…とか、さ。…ね？ 言い方考え方いろいろあるでしょ？…すっげえ、自分勝手（吐き捨てるように云い、笑う。）自分でやらかすだけやらかしててな？ 生むだけ生んどいてな？…屑だね。

猪原がなにか言いかけ、香香美。「あなた、知らなかったでしょ？

香香美は高長を省みた。高長は云った「何を…

香香美「え？

高長「何を、僕が知らなかったと？

香香美「比呂斗兄さんのこと、知ってた？

高長「ぼくは、…

香香美。「知らない。…比呂斗。…息子の比呂斗のことは？

高長「もう、亡くなったと。

香香美「そういうこと…でもね。(香香美はひたすにやさしく、憂いさえ含ませて高長に言う) 大丈夫、…彼女、ちょっと気が狂ってるだけだから…

「いい加減にしるよ！」と猪原がついに叫んだ。車いすの後ろに居なければ彼はとびかかっていたに違いなかった。香香美は云った。「違う？…あなた(と比呂子に言った)カウンセラーくらいには罹ってない？

高長「通院してます。

香香美「でしょ？

高長「だからって、あなた、どこのだれか知りませんがね、人に向かって言っている、…

香香美「じゃ、こういった方がいい？

圓位「もうやめとけ…

香香美「あんたをだました淫賣と？

高長「お前…

香香美「片や可哀想な氣狂い女…かたや嘘塗れの淫売…どっちがいい？ あなたは、どっちとして、こいつを見たい？…いや。どっちでもいいか。そのうち別れるから。…捨てちゃうからね…ポイっと。

圓位「お前は何がしたい！（と叫んだ。）

答えずに香香美はわたしの傍らの眞夜羽の眼の位置にまで腰をかがめて、そして云った。

香香美「ごめんね…だいじょうぶかな？

眞夜羽は黙した。彼はあきらかに自分が今抱くべき感情がわからないまま、むしろ怯えることさえできずに香香美を見る目を震わせるにすぎない。

眞夜羽の幼い肌の不意にかいた汗がにおうのを、(氣のせいかな)わたしはひとりで感じていた。

香香美は云った「あそこに、比呂斗君いたね？

眞夜羽黙す。

香香美「生きてるね？

眞夜羽黙す。

香香美「でも、君、比呂斗くんでしょ？ 生まれ代わりだよな？

眞夜羽黙す。

香香美「わかる？

眞夜羽。「嘘じゃないよ。

香香美「そ。お前ね、…頭おかしいの。お母さんと一緒。病院送りのお母さんと一緒。頭の中に、蟲這ってるの。

謂って、眞夜羽の眼の前に息を吹きかけながら香香美は笑った。

そして斷言した。「お前は所詮ただのお前なんだよ。…

せせら笑う。

「お前以外のもんじゃねえんだよ。…莫迦。

身を起こした香香美は憚る所なく声をあららげて笑い轉げて、やがて、笑い笑いわたしをこづく。云う。「行こうぜ。

私「行く？

香「歸ろう…もう終わったから。

わたしの足のそばで屈みかけた眞夜羽は茫然とし、ちいさく髪の毛を震わせていた。…全身を震わせていたのか？…恐怖に？ 怒りに？ 怯え？…わからない。

踵を返し立ち去ろうとする香香美を、わたしは周囲に声をかけることさえ忘れて追った。と、香香美は立ち止まった。早足に戻り、その儘立ち尽くす無言の集団の、他の誰をも見ないで眞夜羽の耳にだけ耳を寄せた。

何か云った。

振り返った微笑の香香美が行こうと私に顎をしゃくった向こうに、はっきりと憎悪の上目を香香美にむけた眞夜羽の七歳の三白眼を見た。

わたしは子供が殺意を抱き得ることを知った。鮮明で、まがう所のないそれ…

偕樂園の門でタクシーは待っていた。

運転手「あれ？ 二人だけ？

香香美「先に、僕らだけ…

運転手「どちらまで？

香香美「急ぎで、驛まで…まだ、電車あるかな？ 宮島…廿日市まで。

二人で宮島まで歸った。その道すがらに私は香香美に詳細を聞いたのだった。

私「眞夜羽と比呂斗の轉生、あれ、一体どういうことなの？

香「祇樹古藤園のカウンセラー…名前、何だっけ？

私「山羽…

香「の、言ったとおりだと思うよ。基本的には。たぶん、眞夜羽の頭の中に店の事務所に集められた観光地各地のパンフレットだの、夫婦の業務會議だのなんなので聞いてたんじゃない？ 額田何とかっていう名の遠い都の美人さん、と。なかなか聞かない名前、すりこまれる音、ぬかた、と。嚴島、そういう何々小町的な美人の話だの悲戀の話だのいでしょ？ あるのは平家一門清盛の盛衰驕れるものも久しからずあなあわれなりと。だから、あの夫婦、そういう色気のある話でもあればいいけどな…とか？ 云ってたんじゃない。羨望を晒してね。またその一方で、たぶん、夫婦の諍いの時とかにでも、紘夢の名前くらい出たんじゃない。あるいは、お母さんが秘密めかして時に掛ける電話で、比呂の音、聞いたんじゃない？ 比呂くん…比呂さん…比呂先輩…とか？…いずれにせよ特別な、なにか羨望すべき秘密めいたつまりは素敵なものかもしれないふたつの音、ね？…ぬかた、と、ひろ。

或る時スマホだかパソコンだかで検索した、と。ぬかた、ひろ…と。

私「でも、あのこ、できないって言ってたぜ。

香「親の方がでしょ？ 親の前では、できないふりしてるか、本当にすりこみでできない氣になってるかなんじゃない？ 第一、子供にスマホ与えて、弄り倒さないわけがない…

私「で、フェースブックから？

香「デジャブを觀じたかもね。見つけた時。ま、記憶には残るよね。覚える。印象的。ぬかた、ひろこ。死んだ子供。ぬかた、ひろと。…ぼくが生まれたところに…と。妄想を

弄って遊ぶうちに本等と思ひ込む、ないし、名前と死で六年っての見た瞬間に妄想に呑まれちゃったか…家に行ったときも、思い込んでるから記憶がよみがえった気がする…いろいろ言ったはずだよ。これ、前からあるよね？ これ、あたらしいよね、これ僕知らない…でも、一々全部その成否覚えてるか？ 仮に七年前に息子の比呂斗が死んでたとして、家の物のどれがいつからあったかなんか。それに外れた事より當った事の方がインパクトが強い…だいたい、子供の云う事だぜ…ひとつでも當ってりゃ、まわりはびっくりするでしょ？ 以上は七年前に息子比呂斗が本当に死んでたとして、の話。

それから、これは眞實の比呂斗の方、…これは勘だよ。中學生の時の妊娠、何故か兄だけが親父殺して自殺、子供の名前は兄の名前、しかも兄貴は死んでも妹は死なない。自分のせいで兄貴と親父死んでるんだぜ？…もちろん考え方は人それぞれ。残されたものの身の処し方も人それぞれ…だけど、こう考えたら筋が通る。兄妹で作った子なのさ。兄は耐えきれず自死した。だからこそ妹は必死に育てようとしたのさ。すくなくとも最初のうちはね。あの子…比呂斗くんをね。自分を愛して死んでしまったお兄さんの形見として。けど、無理だったんでしょ。普通の子供を十何歳がそだてるのも困難だったのに、…しかも、それに母親までいろいろおかしくなりだせば…ね？

たぶん、本人も限界がきたのかな？ 自分が生んだ比呂斗は死んだと思ひ込んで、それでなんとか解消したのかもね。

私「通院は？ 比呂子の？」

香「カマかけただけ。たぶんそうだろうな、と。おれはちゃんと疑問形で云ったぜ？ それから、深雪と和哉は…

私「誰に聞いたの？」

香「さっきの比呂の音だよ。息子に神秘的なものとして比呂の音が刷り込まれてるくらいなら、何か理由があるだろう。それに眞夜羽、自分はおじいちゃんの子だとかなんとか世迷い事云い出したんだろ？ ということは父親があやしいって思ってたのさ。つまり、深雪は比呂何々さんと密通してる…僕の本当のパパは比呂なんとかさんなのかも、と、そう思った、と…ね？ 無意識的にでもね。和哉、店で調子に乗せてプライベートいろいろ話させたら、たまたまアルバムなんか見せて…そこに居たの。紘夢っていうのが。修学旅行の写真でもとなりで肩波んでピース、…ね？ 十人ばかりの集合写真。他の奴の話はいっぱいするの、あの人。けど、紘夢の話だけは避けるように何もしない…この人何のかな？ ひょっとして、旦那のほう、浮氣、知ってるのかな？ だったらこいつが怪しいな…と。で、カマかけた。…でも、ああいう込み入った話だとは知らなかった…俺はあくまで紘夢元気って？ そう云っただけだぜ。

謂って、香香美は笑んだ。

續けて曰く「でも、基本的に、そんなに悪人なんかいない。だれも、普通にいい人なんじゃない？ そう思わない？…例えば、お爺さん、亡くなった眞夜羽の…お爺さんの子だなんて濡れ衣（と笑った。）…でもたぶん、すごく優しくていつくしみのある人だったんじゃない？ いつも、眞夜羽にも。お嫁さんにも。だから、此の人がお父さんなんだって…そう、尤も願わしい一瞬の妄想を口に出しちゃったんだよ。あの子。眞夜羽。耳で聞いたら、本人は事實だと思ひ込む…そういうこと、つまり、俺たちのお会いしなかったおじい様でさえも、本當に、普通にいい人たちだったんだと思うよ。

感傷も無く、微笑と共にだけ香香美はそう云った。

廿日市から十時 14 分の最後のフェリーに乗って宮島に。ホテルに一泊。大幅にチェックイン時間を過ぎた我々をホテルのフロントは寛大にもゆるしてくれたのである。

○

玖珠本- 香香美 Line、2019.09.20.

香香美「今日はありがとう

玖珠本「つぎいつ会える？

香香美「サイゴンに雪が降る日に

玖珠本「OK（笑）

○

香香美から片岡比羽犁から宛て。メールに添付。

2019.9.23. メール

（本文）

沖縄にいる。…沖縄のどの島かは教えないでおく。

教えたら、あなたはこっちに来てしまいそうだから。

添付は、あなたが気に掛けているはずの事について。

かれらにはすでに連絡しておいた。終わったか、終わっていないかだけ。…聞いているだろうね。穂埜果から？

彼にあなたから伝えてもいい。どちらでもいい。

あなたの心を翳らせるだろうけれども、秘密にする気にはなれなかった。

忘れたかったら、忘れて仕舞うがいい。

香香美

（ファイル）

2019.09.19.

宮島のホテルに帰った。

時間は 10 時 45 分。

私は先にシャワーを浴びた。出てくると久村はワードを叩く。何してるの？ とは、聞かなかった。あらかた知れた。久村はわたしには秘密にしたいようだった。——ちょっと待ってて…すぐに、と。久村は言い、そして振り返って、

「先に寝てていいよ。

わたしは応えなかった。ただ、笑みをくれた。

ややあって生返事の久村に言う。

私は、その背後から。

「聞く？

…

「あの坊主…

…

「圓位、さんか。

…

「昼間、お前、貰ってたでしょ？

…

「笛…尺八…

…

「聞く？

笛袋から尺八を抜く。一本の竹をくりぬいただけのもの。

久しぶりだった。吹き方を未だ覚えてあるものかどうか怪しかった。

手のひらにその材質を確認した。

驕った笛だった。

煤に水気を何十年もとばした篠竹を断ち切って、漆を塗ってある。龍笛のような巻き。

意外な程軽く、そして硬い。

抜けきって、それで管がこの太さならそうとう図太い竹だったに違いない。

一本の短いひび割れ。…問題はない。表面だけの厥れ。

そしてそれがいまや自然そのままだったかにも、塊り切っている。

私は吹いた。

ひたすらな慈愛のピアノニッシモ。

聴て五時近くになった。

我に返ったように久村は手を止めた。わたしはずっと、その背後の離れた壁際に立って、

もたれながらに吹いていた。

管があたたまってようやく管の口に唾液が垂れはじめた。

だから次第に鳴りはやさしくなる。

久村は資料を送信した。

ややあって振り返り、久村は云った。「そこに居るのは、知ってた。

私は応えた。「いつ、秘密にしたっけ？

私たちは笑った。

相変わらず私は笛を吹き続けた。

久村は聞いた。

ふと哥口から放した唇に、私は云った。

「もう朝だね…

久村。「もうすこしで…そういえば、お前…

私。「なに？

久村。「別れ際、…あれ、なんて言ったの？

私。「別れ際？

久村。「なんか、云ったんだろ？ 眞夜羽に…あの、

私。「最後に？」
久村。「なんて？」
私。「駄目だよって。」
久村。「何？」
私。「お母さんが、やれっていっても、お父さんを殺しちゃだめだよ。…って、お父さん、…和哉さん、すこしも悪くないんだからね、って、…と、私は笑った。
久村は腑に落ちなかった。
久村。「なにそれ？…なんで？」
私「夜明け、見に行く？」
久村（笑い、）「俺たち二人で？」
私。「…そ。」
久村。「海？」
私。「ごめん。あっちで見飽きた…山の上から…」
久村。「山って言っても…」
私。「申し訳程度だけどな。」
笑う。
夜の明ける前るに部屋を出る。山道を登った。
私は衣服を取り出し、スケッチブック等だけのこして鞆を抱えた。それから尺八を、笛袋に入れて。
久村。「描く？」
私。「…さあ、念の爲。」
久村の笑みに邪気はない。
わたしの笑みにも。
山の上に…なんなんだろう？六角堂がある。日本建築というよりは中華様式…漢？唐？ちょっとわからない。四阿とも見えない。二階建て分くらいの尖塔である。
その傍らに久村は東の方をさがした。
「どっちだろ？」
昏くて目印がないのだ。大鳥居でも見得れば、それを見た右の方が東。
たぶん。
「そのうちわかるよ。」
わたしは言って、笛を吹き始めた。
最弱音。
どんなに太く息を吹き込んでも、最弱音にしかならないささやきの楽器。
竹それ自体が耳元に聞く爲の音なのか。
吹く人の耳でさえ、すでに音の鳴る場所からは遠すぎる…
吹き已めて、私は久村の頭部を一撃した。
失神から覚めたときには久村はすでに後ろで縛られ、足も拘束されていた。
わたしのシャツの一つを引き裂いた布で。
久村はなにも話せなかった。
さるぐつわを咬ませられ、さらに布に鼻と口は覆われた。

久村は匂いを立てた。

ぶちまけられたペットボトル一本分のガソリンのそれ。

鞆の中に入れていおいたもの…

久村が地に仰向け、藻掻きながら布の向こうに聲を立てた。

わたしは云った。

「びっくりした？

久村が聲を立てる。だから謂う、彼に「理由？

聲。だから謂う「内通してるでしょ…だから…密告、…か。けど

聲。「彼等は関係ない…まして、あの人は…だって

聲。「珍珠本さえ言った。笑いながら。密告するなら、久村さんの好きにさせないよ。それで逮捕拘束されたとして…それはそれで、それが俺たちの革命…革命未遂か…の、結果だったってことでしょ？

聲。「いいよ、それで。…じゃない？

聲。「俺もすれでいいと思う…でも？ 罪は？

聲。「せめて罪とともに居るべきだ。お前も、…せめて、罪くらいは…

聲。「俺が処罰してあげる。もちろん彼等は否定しない…すきにしていよいよ、と。…オツケー…

聲。「お前のだろ…これ。煙草…

聲。「うまいか？ こんな…すっていい？

聲。「体に悪そう…

聲。「やめといたほうがいい。

見た。私は、久村に投げ捨てた煙草の小さなオレンジが引火し焰を燃え上がらせるのを。いつかさるぐつわも何も燃え尽きていた。

なにも束縛するものがない中に、久村は赤ん坊のように四肢を曲げ、大口を開けて無音に、たぶん、彼にしか聞こえない叫び声をあげてゐた。

燃え盡きるまで待つ気も無かった。せめて本当に、約束の取りに夜明けを見るまでここに居ようと思った。

燃える久村は極度に匂った。

ほんの数分で日が明けた。

振り返ると雄鹿が一匹だけいて、そしていじけたようなあの妻問いの聲を立てた。

その音聲は耳の近くに聞こえ、空間に響きさえない。

…

ホテルに帰った。7時半に一人チェックアウト。連れはもう朝一で見て回ってる。もうすぐ帰って来る。それからシャワーでも浴びてチェックアウトすると思う、と。ネット予約の爲、会計はすでにカード拂い済。もうしわけないが、久村が払ったのだ。

神社の方に行った。

入って、一応参拜した。何というでもなく心配がして振り返ると、海に突き出した舞台の一番先に十歳ばかりの少年が立っていた。一瞬、まるで海から飛び出してでも来たかにも見えた。こんな島にもホームレスの、しかも子供がいるものなのか。

いかにも浮浪児らしくうす汚れ、穢い。数十メートルも離れて居れば嗅ぎ取られよう筈

もない臭みさえ鼻に嗅がれる。そんな見苦しい程の子供。
呆気にとられるともなく見ていると、右手の方に女の悲鳴が聞こえた。
寝起きなのか、部屋着に髪もとかない女が立ち尽くしたままに悲鳴し、さらにそのままもう一度悲鳴をあげた。
ふたたび口が開いた瞬間女は駈けた。
その距離ほんの百メートル程度。女は足が極端に遅かった。かつ、その半狂乱に足がもつれた。なんども転げそうになり、臆て少年の足元に顔から転げ伏せる。すり剥く顔にも気付かず身をのけぞらせて女は叫ぶ、——騰毗！
と。
気付けばわたしはふたりのすぐ近くにまで近づいた。意識も無く。女が少年に襲い掛かったものと、思わずにも案じて駆け寄っていたようだった。わたしは我に返った。
少年は短いスポーツ刈りで、汚れた頬を女の爲の笑みにゆがめた。
謂った。「安心しろよ。帰ってきた…
わたしにあくまで他人を見る一瞥をくれ、そして無視する。
女は四十前か。荒み切りながら色気が抜けない。彼女は言葉もない。少年の足にすがる。
「もう大丈夫…しっかりしろよ。
思わずに私は謂った、「あなたが…
少年はふたたび私を、その時始めて見たような色で、その目に見た。
「あなたが、当主の…
女が叫んだ。
「ああああ…と。
叫びやまないのを気にも留めず騰毗は女の頭をなでてやる。
謂った。あきれ果ててすてばちに叩くへらず口として。
「ちょっとうろついただけ。貴種流離っていうだろ？…男の通過儀礼だくらい思っとけ。…人が見てる。…帰るぞ。
騰毗は犬か迷い猫でも従えるように、まともに腰もたたない母親を連れて町の方へ消えていった。
久村も圓位もなにも云わなかった。当然のこととして、謂うのを忘れていたということか。佐伯騰毗がそんな少年…ほんの小僧だったことに、わたしはまったく気づいて居なかったのだった。…
波の音は、浅瀬の遠くに冴えた。

文書 14

文書 14

文書 14

○

圓位から香香美から宛て。2019.10.12. メール

香香美清雅様

生きておられるなら聞かれよ。

茨でお別れした後の事どもを、念の爲いまさらの忿怒と軽蔑もてご報告する次第。

芳井町偕楽園に残された我々、詞もなし。

ただ黙止す。

時に猪原氏、ようやくに高長氏に聲を掛けて曰く「あの、變な男、あれ、一体だれなん？

此の時に高長氏答え得る筈もなくに口開きかけるにはす向かい、座り込み顎突き上げた額田比呂子さんいきなりに口を開ける。阿のかたちに大口開け息を吸う。

しばし黙止す。時だにも止まる。

かくて比呂子さん息を吐く。私思えらく、今、此の女聲すら奪われて叫ぶと。

高長氏駆け寄る。

比呂子聲なく暴れ、そのつつみ込もうとする腕を払もう。猪原も比呂子を取りおさえようとする。

自由になった額田比呂斗の車いすのどこかを、その誰かの足だか手だかが叩きつけたのか…もとから、その異形はバランスが悪かったに違いない。後ろ向きに車いすはひっくり返る。比呂斗が聴いたことも無い低い割れ聲で、聞いたことも無い音をあげる。

長く。

ひたすら長くに。

猪原も高長もそれどころではなかった。朱美はその時には失神していた。何故？…わからない。いきなりに精氣をとりもどした一重が比呂斗に駆け寄った。

どう抱いていい物か、彼女には判らなかったに違いない。小さなヘシ曲がった細い四肢をばたつかせひっくり返った比呂斗の傍らに膝間付き、つぶやく——此の子…この子…叫んでいるかに、耳に最強音に聞こえた、——なんにも…この子、なんにも悪くないんよ！

つぶやいた。

——悪くないんよ！

私は見て居られなかった。振り返れば眉村は茫然とした。

介護士が三人ばかり走り、比呂子をむりやり抑えゴムのさるぐつわを咬ませようとする。歯をへし折りそうなほどにねじ込む。

誰もがわめく。

高長が叫ぶ…私に。——歸って！

且つは號ぶ——出て行け！ 歸れ！

私は眉村親子の手を無理やりに引いた。

タクシーはすでに無かった。受付近くの電話帳にタクシーを探す。

背後、誰もが叫ぶ。

四面四維に喚く。

故、携帯電話に怒鳴りながらにタクシーを喚ぶ。

外に出る。

外で待ちながら、硝子戸向こうの背後に已むとも思えぬ怒號と狂騒の渦なす音響を遠く聞く気持ち、あなたのご存じか？

ご理解いただけるか？

廿日市まで無言で歸る。

一重は時に唇をだけわななさせる。

フェリーはもうなかった。故、無理やりにホテルを探し、その日は泊まった。

島の山の傾斜、樹木にひっかかった焼け焦げた腐亂躰發見の事。異臭を放ったそれ。身元不明の蛆生うるそれ。あれは久村氏でございましょう。ちがいますか？

あれはあなたの手か？

久村氏、大學には来ていらっしゃらないとのこと。

あなたはまだ生きていられるのか？

生きておるなら聞かれるがよい。

歸ってから毎日見舞うに店も開けず眉村親子引き込むばかり。…何をすればよいものかわからんと。何をする気にもなれぬと。

これは和哉氏。

一重さんは事件についてはなにも云わぬ。ものさえも私には言わぬ。

ただ笑む許り。

9月24日、眞夜羽を憐れみ和哉さん同伴で祇樹古藤園に行く。

何をしでかしたかは知らん。深雪顔中をぐるぐるまきの包帯に掩う。開く孔は鼻のそれのみ。笠原に問う、何があったと。

笠原憚っていう、…旦那さんにはつたえたんですけれども…

眞夜羽と深雪をふたりにし、和哉、問うてもなにも答えず。

眞夜羽、母に明らかに動揺しており。わたしは連れて來たことを後悔した。わたしの愚案だった。わたしの失敗だった。

深雪と、それでもなにか心のふれ合いがあったのか。

その帰り際眞夜羽安静。心おだやか。わたしに冗談口さえ利いた。

次の日、9月25日。何ごともなし。眉村家行けどもだれも出ず。不在かと思う。

9月26日。同じ。

9月27日。町が騒がしき。眉村近所の山倉、沙羅樹院に來る。

山倉曰く、もう三日も眉村を見ていない。眞夜羽も學校に來ていないと聞く。教師家庭訪問すれど誰も出ず。これあやしきと。

故、これより警察立ち合いで山倉眉村の内に入る。住職も同行恃むと。

故、行く。

呼べど叩けど誰も出ぬ。賠償ならわしがすると山倉縁の戸のガラスを農具置き場のスコップに叩き割る。

土足に入れば異臭。明かりつければその居間に、一重横たわっており。死んだかと思う。見れば目を開け瞬きもする。聲かけれども反応せず。二階に上がった山倉叫ぶ。署に連絡入れておる警官、中斷し駆けあがる。わたしも隨う。二階、すさまじい異臭。

山倉、袈開いた部屋の前に立ってをり。どうしたか？…見よや、と。

見ればそこ、板の間、本人の部屋ならんすでに命なき和哉の慘殺死躰あり。死因わからず。損傷極度。瑕なき皮膚、肉の方が稀か。蠅が無數に部屋の内を舞う。

その中に眞夜羽、眼をむき出して我等を見返る。表情なし。目に心の色なし。硝子珠に粗末なペンキの白でも塗りたくったが如。眞夜羽、その死せる肉を両手に弄び千切り千切り弄びてただただ彼の無聊をつぶしをるなり。おわかりかりか。

香香美様。

あなたはまだ生きておいでか。

恥ずかしげもなくに、まだ生きておいでか。

一体あなたは何をしたか？

何物か？

一体だれがあなたを島に呼んだものか！ わたしか？ たしかにわたしも！

お分かりか。ただ一日にも満ためにあなたのまき散らしたこれら損害を。收拾不能の骸どもの無残の群れを。おわかりか？ あなたが自分のその口にその手におった。不意に。振り返ってその匂いの許を探そうとした。

いつか嗅いだ沙羅の花の…地の上に散った…あの匂いを思った。

自信はない。

あんな匂いだったかもしれず、そうじゃなかったかもしれない。

すでに、記憶に痕跡を残すまえに消え失せてしまった。

あるのは繁る樹木らの静寂。

だから、僕はその山肌を登るのだった。

樹木の翳りを潜り、何時か竹の冴えた芳香が

多香鳥王

多香鳥王

四方を、四維をさえ取り掛こむ。

竹林の中は淡い闇…昏がる明るさのほのか…息を吸った。

頭の上の遙かに声がした…迦迦美與夜。

女とも男ともつかない、ほそい、その幼い声を聴いた。

迦迦美彌波。——今度は右に。

迦迦美汗彌。——今度は左に。

迦迦美許波。——今度は斜めに。

迦迦美苧彌。——今度は垂れさがるように。

迦迦美夜宇。——今度は傍らに撥ねて。

迦迦美婆波。——今度は通り抜けるように。

迦迦美苧波。——今度は背後に。

迦迦美騰淤。——今度は眉の纒かの上に。故に伽伽嫩綺姚摩娑ハ笑みソシて振り返れば
匂い立つは鐵鍋に茹でる青い澄んだ湯。海さえ煮立つと綺姚摩娑は思うものの響き渡っ
た無数の笑い聲に邪気はない。

故、綺姚摩娑は沙沙夜玖

——何を煮てる？

——お前に喰うわせる爲にだよ。

少女は云った。

——俺を似てるのに？

綺姚摩娑は笑った。既に綺姚摩娑の四方を取り巻いた九ノたりの少女ら、綺姚摩娑の腰
にも満たないにその顔ゝにかぶせた安摩の面の下に微笑む。

——お前が笑んでも見えもしないよ。

謂った綺姚摩娑に一齐に笑う。

按摩の顔はどれがすべて、すこしづつまちがっているのでどれもが違った。あるいは、こ
ちらの方が本当かと綺姚摩娑ハ思う。

——顔、見せな。

綺姚摩娑は云った。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞破だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞魔だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞迦だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞囉だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞烏だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞夜だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞彭だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞虵だよ。

ひとりの安摩がささやく。

——和多志が伽虞徽だよ。乎字波。多香擣喇や。字囉夜。陀迦榻驪ノ猥字や。縵。此処にてや。唵。陀迦榻驪ノ猥字がよここ来てよ耶乎波。陀迦榻驪ノ猥字もここに来れば爲破。何するや字字麼。なに見るや阿縵波。阿乎波。何きくや？

字爲破阿阿…

多香鳥や淤まえは今よ答えよや

淤縵…

答えやよ

淤縵…

答えん破

縵波阿阿…

答え流や

字爲以以以以以…

故に太香涛犁ノ猥字答えて——お前らに喰われにだろ？

笑う。

——癡我字？

すがたなくに四方に鳥ら無数にも羽搏きあがり、…鳥。

と。

猥字思へらく、——鳥。

飛ぶ、…と。

安摩ノ伽虞破沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トあれば又ハ安摩ノ伽虞魔沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トあるを又ハ安摩ノ伽虞迦沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トありテ安摩ノ伽虞囉沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トあるヲ又ハ安摩ノ伽虞烏沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トあ琉に又ハ安摩ノ伽虞夜沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トあるも又は安摩ノ伽虞彭沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トありシ我またハ安摩ノ伽虞虵沙沙夜祁囉玖——意禮乎三與夜トあるこ曾又ハ安摩ノ伽虞徽とあるが太香涛犁ノ猥字笑み弓その身に生ふる芳香四維に甘くただよへるに爾に安摩ノ伽虞破我にかえりて都儂耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶淤破阿阿呼んだ耶阿阿波と。

爾に安摩ノ伽虞魔我にかえりて都儂耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶

淤破阿阿呼んだ耶阿阿唵阿と。
 爾に安摩ノ伽虞迦我にかえりて都舞耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶
 淤破阿阿呼んだ耶阿宇阿宇と。
 爾に安摩ノ伽虞囉我にかえりて都舞耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶
 淤破阿阿呼んだ耶阿波阿波と。
 爾に安摩ノ伽虞烏我にかえりて都舞耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶
 淤破阿阿呼んだ耶阿縊波阿と。
 爾に安摩ノ伽虞夜我にかえりて都舞耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶
 淤破阿阿呼んだ耶阿意字波と。
 爾に安摩ノ伽虞彭我にかえりて都舞耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶
 淤破阿阿呼んだ耶阿宇宇阿と。
 爾に安摩ノ伽虞蚩我にかえりて都舞耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶
 淤破阿阿呼んだ耶阿宇阿波と。
 爾に安摩ノ伽虞徽我にかえりて都舞耶氣螺瞿お前を耶お前を耶乎波だれが耶阿だれが耶
 淤破阿阿呼んだ耶阿阿縊波阿と。
 伽 太香斗璃ノ猥宇宇多え良ク
 伎虞琉爲能淤淤淤
 伎癡我爲能乎乎乎耶
 阿乎乎乎乎
 意字宇宇宇
 破淤淤淤淤
 癡能美兒耶阿阿
 智能美兒耶淤破
 志豆能迦美以以
 氣我禮我嫩乎耶阿破淤耶乎耶阿阿阿
 氣我禮奴能於宇波
 氣我禮能嫩爾爾耶阿
 登伎那玦會
 宇阿波
 由伎破阿夜阿阿
 由伎波布璃氣留
 飛魔那玦會
 意字破
 阿米波阿夜阿阿
 阿米波布驪氣類
 古能由伎乃淤淤淤宇
 榻伎那伎我碁登淤
 古能阿米能宇宇破
 飛摩那伎我碁登淤
 意字宇宇破阿阿阿

意字字字琉字琉破阿

玖摩毛淤癡須字字阿

玖摩毛淤癡須耶淤母飛都都字阿波

淤母比都都久琉字破阿

胡能耶魔嫩癡乎乎乎乎

胡能耶魔嫩癡乎乎乎乎…

いきたゑてせんすべもなみみわたせ麼夕氣の色だにそめぬき氏よもをもうづめてしらゆ
きしふりシを伎夜宇

以上は篤胤の勝五郎再生記聞を典拠と

し萬葉卷十六竹取歌十首を主題とする

黎マ 2020.12.02-23.

奥書

以上は黎マに依って 2020.12.02-23. に書かれたものの第三部その後半

ホームページ

<https://senolema.amebaownd.com/>

多香鳥-5

著 黎マ

制 作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
